
鐘の音の少女

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鐘の音の少女

【Nコード】

N28020

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

そのイケメン新任教師——新堂恭一郎は悩んでいた。何故、自分に女の縁がないのかを。先程も女性にフラれて、飲みなれない缶ビールを飲み干したばかりだ。

されど仕事は仕事と切り替えていく。殺人犯の所為で発生した夜の見回りもこなして、家に帰ろうとしていると、丁度殺人犯を拘束するまでに到った。

が、そこで恭一郎は失敗を悟る。

殺人犯の首が——純白の剣によって裂かれていた。
剣の持ち主は、白いゴシッククロリータの服を着た——少女だったのだ。

そこから、恭一郎の教師人生は大きく狂いだす。
コメディ系あれ学園ちよつとしか含まれてないよ物語。

序章 白ロリ（前書き）

これは別の掲示板で掲載していたものですが、その掲示板が凍結され消えるようなので、こちらにリニューアルして続けたいと思います。

キャラクターの名前は恭一郎ですが、別にパン屋とは一切関係御座いませんので、ご注意下さい。

序章 白ロリ

——仕事と女、どっちが大事だ？

そう聞いてきた友人が居たっけか。

俺——新堂恭一郎にはどちらも大事としか言いようが無かった。

——今日の今日までは、だ。

「だーっ！ 知るか知るか！」

職員会議でデートに遅れたくらい、許すべきであろう。もし自分が女ならば、驚異の自制心で許してしまうに違いない。

それくらいで男を振ってしまう現代人の忍耐力についても、これから考慮すべき問題であろう。ゆとり世代の問題が如何に深刻かどうか悩ませられる事態となってしまうた。

普段は絶対に飲まない缶ビールを喉を鳴らして飲み干しながら、宵の帳の支配下で、公園のベンチに腰掛ける。

吹き荒ぶ風は生暖かい。嗚呼、春。

新芽の芽吹く季節に出来た恋人は、春一番のインパクトを残して消え去ってしまった。

「ド畜生っ！ 職員会議の馬鹿野郎っ！ 折角の彼女だったのにいっっ！」

——広いベンチで一人、男泣き。

虚しい構図であろう。実際、ほろ酔い状態の恭一郎でも、それくらいは理解できていた。しかし、この程度の事で止められる悲しみではなかったのだ。

生涯二十二年。私立小学校を主席、私立中学校も主席で卒業後、何故か書類の手違いで入学した不良の高校でもトップの成績を残し、センター入試を経て一流大学へ。勉強とバイトに明け暮れた大学生活を終え、男なら誰もが羨む花園、琴乃音学園のークラスを任される保健体育兼地理歴史学の教師として好調なスタートを切ったはずだったのだ。

時間の限り勉強やバイト、時には喧嘩。そんな事ばかりで女日照りだった恭一郎は、ある意味では勝ち組で、ある意味では負け組なのかもしれない。

容姿といえば、背が高く体格も良くて、端正な顔立ちをしている。髪は少し長めで、黙っているとクールで良い男なのだろうが、口を開けば皮肉と溜息のオンパレード。キレると異常なまでに冷静になり、口論や喧嘩などは無敗記録を達成し続けている真っ最中であつた。

そんな性格なので女の友人はゼロに等しく、居るのは男友達と高校時代の舎弟だけ。

――泣かずに居られまい。

「何故、ダメだった！ 何か敗因があるはずだ！ 思い出せ！」
少し、回想してみる。

そう……黄昏に街が沈み行く時間帯。この公園の噴水前。

「もう、遅いよ！ 何してたの？」

「職員会議だとメールを飛ばしただろう。これは教員の義務で、君みたいにふらふらしている大学生とは違って何かと忙しいんだ」
その後、彼女は怒って別れを告げて消えて行った。ちなみに、先程コンビニでビールを買った際、その女性は茶髪の今風な若者のバイクの後ろに跨っているのを確認している。

――事実を事実として突きつける事の何が間違いなのだろうか。

恭一郎はしばらく悩み続けていたが、月が高く昇る頃にようやく結論が出た。

「分かったぞ！ 俺は悪くない！ はーっはっはっは！」

それは、酔いから来る結果だろうと後に気付く。

――乾いた地面には、十数本の空き缶が転がっていた。

序章　　く白りく

——ガギギギギギギツ！！

金属鈴が小さな金属ハンマーでぶん殴られ続けている音が聞こえる。朦朧とした意識の中で、非常に不愉快なその音を消さんとすべく、腕を伸ばし、音の発生源へ手刀を落とした。

確かな手応え。そして、不愉快な音は止んでくれた。とはいえ、それは一時的に止まったに過ぎず、封印のスイッチを押す以外、完全に黙らせる方法は存在しない。

身を起す——はずだったのだが、急激な頭痛に見舞われ、思わず眉間を押さえた。どうやら、二日酔いらしい。慣れない酒を飲んだ結果だ。

「くっそ。朝っぱらから最悪だな……」

家賃を極力セーブする為に選んだ、知り合いの伝手で借りた安アパートのベッドの寝心地は、本家の羽毛布団と雲泥の差で、最悪である。

実家は格調高い家の次男坊。長男である兄が死んだ今、恭一郎が継ぐはずだった家は、去年に晴れて地方公務員となった義姉に押し付けた。優しい人物だが恭一郎はどうにも苦手で、会うつもりも毛頭無い。あの羽毛布団で寝られる日は、もう来ないだろう。

それでも体は、こんなスプリングのロクに効いていない安ベッドに慣れてくれているらしく、少し骨が軋むだけで済んでくれた。

取り敢えず目覚まし時計を手繰り寄せ、再度鳴り出す前にスイッチをオフにしておく。一先ず、この頭痛を何とかしなければ。

ふらつきながら、万ーにと枕元に備えておいた液体酔い覚ましを手

繰り寄せ、一気に呷る。苦味と青臭さが口一杯に広がり、しかし頭痛とどちらが不快かと言われれば、水を飲んで回復していくこの苦味のほうがマシなのかもしれない。

まだ少しだけ苦味の残る口に焼いていない生の食パンを突っ込みながら、外に出て牛乳瓶入れを確認する。

――空の瓶だけだった。いつもなら、飲み終えた後洗って乾燥させた牛乳瓶と新品を入れ替えていつてくれているはずである。首を傾げていると、息を荒げて元凶がやってきたようだ。

「うわっと！ 遅れてすみませんっス！」

悪びれた様子もなく、そいつは瓶牛乳を指の間に挟んで持ってきた。地毛なのだろう、淡い茶髪を長めのショートにしている愛らしい少女だ。イメージ的には澁刺としており、健康的でいて綺麗な肌と大きな瞳。牛乳配達の制服なのか、青と白の上下が眩しい。

瓶を持ち替え、こちらを見ると、何が珍しかったのか感嘆の声を漏らす。

「おー！ お兄さん、食パン派っスか！ 確かに牛乳と合いますもんね！」

「……朝は時間が無いからな。それにしても、バイトか。精が出るな」

「たはは……。母子家庭なモンで」

「そうか。精々頑張れ。金銭面で引っ張ってくれる良い彼氏を引っ掛けるんだな」

そう言つてやると、「モチロン！」と親指を立てた拳をこちらに見せ付けてくる。

「お兄さんはどうですか？ カッコいいし、彼女いますよね？」

「俺は、もう女は信じないと誓ったのさ」

「なんスか、それ。……あ！ もしかして振られたんスか？」

空気に罅が入る。罅を入れているのは自分なのだが、仕方が無い。彼女は恭一郎の逆鱗に触れてしまった。

恭一郎の眉が危険域にまで吊り上り、こちらを見ていた彼女の表情

が引き攣つて血の気が引いている。さながら、上司の機嫌を損ねた平社員を激写したような構図であった。

「いやー……その……。お、男は仕事っスよ！　って、なんスかその手！　可愛い女の子に何するっスか！？」

「あーそーだなかわいいーなお前はーッ！！」

「いだい！？　痛いっス！！」

アイアンクローを見事に決めた恭一郎。彼女が思わず落としそうになった空き瓶を足で受け止め、地面に下ろす。

ふと、我に返り、彼女を放してやる。

「俺、初対面の相手に何してんだろっスな」

「ホントっスね。こんなアグレッシブな出会い、初めてっスよ」

こめかみの辺りを押さえている少女は恨みがましい視線を向けた後、腕時計を見て悲鳴染みた声を上げた。

「やばっ！　遅刻するっス！　んじゃ、お兄さん！　また縁があったら！」

「おー。頑張れよー」

空瓶二つを回収して駆け出す彼女を見て、溜息を吐く。

昨日のショックで少しおかしくなっているのかもしれない。

——自重しよう。最低限、職員室では大人しくしておいた方が吉だ。そうに違いない。

牛乳瓶の蓋を空けながら、そう心に決めていた。

イタリアンテイストな黒いタイトスーツを着込み、ワインレッドのネクタイを締め、サーベルを模した愛用のピンでそれを留める。
昨日整理した書類も持ったし、高スペックのノートパソコンも同じ

く業務用の鞆に入れてある。愛飲しているスポーツ飲料もボトルケースに完備。準備は万端。

玄関の鍵で戸締りしてから、恭一郎は朝の澄んだ空気に身を躍らせる。

午前六時。登校してくる生徒も殆ど居らず、快適な時間である。

子どもが嫌いな恭一郎にとっては、清々しい朝のページだったりする。何故教師になったかといえば、手ごろな公務員だったからだ。あの程度の試験、勉強の鬼であった自分が落ちるはずも無い。

まあ、高校生だっただけマシだ。相手が中学生でキレて、小学生なら発狂していたに違いない。

（幸い、顧問って面倒臭いものもやってないし……今日は何するか）

バイクで通勤しても良いのだが、恭一郎は朝独特の静けさと空気が好きだった。できれば、それらをゆっくり歩いて感じたい。

しかし、バイクもバイクで良い。風を切る爽快感を感じさせてくれるので、月に一度は遠乗りしているのだが、今月はまだ行ってない。明日にでも行こうか。今日は金曜日。土日は休みだ。

さておき、この空気を堪能しようと、大量に肺へ送って、深呼吸。（嗚呼、良いなあ。この朝の清楚な静けさ。喧騒が沈みきっている街の様はどうしてこう美しいのだろう）

何だか詩人にでもなった気分だ。誇り高い恭一郎にとって、詩は嗜むものであった。今でもまだ、作れるだろうか。

――刹那。

竹箒が地面を掠る音。そして埃が舞い、埃高き男になってしまった恭一郎。

視線を竹箒から上へスライドさせていく。

……黒に近い深緑色の短めなスカートから覗く白い足は華奢だ。足までもを覆う同色のコートが俗世を離れたような、常識的ではない雰囲気漂わせる。胸には金色のロザリオが輝き、小ぶりだが膨らみがある事から女性らしい。そして、フードのような物を見たあた

りで、見当がつく。

成る程、聖職者——所謂、シスターだ。それにしては、肩を露出させたり白地のシャツにフリルをつけたりとやりたい放題ではあるが、彼女がそうしたわけではないだろう。勘だが。

さて、現在の状況といえ、黒いズボンが埃で白くなっている。これがガキの仕業であつたとするならば、確実に怒鳴っていただろう。今更ながら、彼女の年を考える。

きめ細かい白めの肌、くりくりとした大きな瞳、儂げな雰囲気、可愛らしい造作、フードの間から覗く緑色の絹のような髪、恭一郎の腹部ぐらいまでしかない背丈。

最後が決定的だったろう。これは見紛う事の無い、ガキの姿だ。

「……俺が何を言いたいのか、分かるか？」

「ご、ごめんなさい……」

「何を言いたいかで『ごめんなさい』？ それを本気で言っているなら大したモンだな。お前、大物になれるよきつと」

えらく辛辣な口調だ。分かつている。これは醜い行為だと。しかし、子どもは好きになれない。

『経験不足だから仕方が無い』、『そういう親の元で育った』、『子どもに酷い事を言わないで』。

——思い返すと反吐が出る。

挙げた例は、今まで聞いてきた言葉の数々だ。

経験が不足しているなら、その分考えろ。何の為の頭脳だ。三歳児には酷かもしれないが、落ち着いた年頃での失敗はありえない。

そういう親の元で育ったというのも、ちゃんちゃら可笑しい。どんな教育方針があろうとも、それを是認するか否認するかは己次第。軟弱過ぎる。

では自分が酷い事を言われたら怒らないのだろうか。そんな馬鹿げた話は無いだろう。

大概大人も身勝手だが、それは事情を理解した上。浅慮で浅知恵しか回らない無知蒙昧なガキとは、それこそワケも格も天地の差。

——奴等は百害あつて一利ないのだ。

「え、えつと……」

たどたどしく埃を払う様も、異様にとろく感じて苛立ちを誘発させる。

が、自制する。——これ以上はいけない。越えてはいけないボーダーライン。これでは、こちらの身分に傷がつく。

世間を賢く生きる為には、極力自分を良く見せる努力は必要だ。たとえ——どんなに憎い相手でも。

「ああ、構わないでくれ。掃き掃除をしていたんだろう？ 朝も早くから、偉いな。勤労感謝の日に褒めてもらえるぞ」

「え……？ そ、そうなんですか？」

「ああ。俺なら、そうするけどね。後、ごめんね？ 少し気が立ってたんだ」

人畜無害そんな爽やかスマイル。これも何度練習した事か。実家の教育方針と高校の荒れ具合でかなり不良化していた時期があり、大學生生活が始まってからはバイトの先輩に鍛えられたのだ。彼女には未だに頭が上がらない。

少女は警戒を解いてくれたようで、花のように可愛らしく笑っていた。

「あ、あの……私、蘇芳ゆりなつて言います」

「ゆりなちゃんか。頑張つてね？ 俺はお仕事に行かなきゃダメなんだ」

「な、何をなさっているんですか？」

——敬語まで使えるのか。ませた子だ。

「学校の先生だよ。そうだね、ゆりなちゃんが大きくなったら会えるかな？ それじゃ！」

踵を返し、恭一郎は出来るだけ大股を心掛けつつ、その場をさつさと去る。

清々しい朝が打ち壊した。そして、あのガキの巣窟へと赴かなければならない。

——職場は戦場だと、よく言ったものだ。

リノリウムの廊下を歩く度に、黄色い歓声が上がる。

自分に浴びせられる賞賛だ。自画自賛では無いが、一応はフランクで優秀な教師として振舞っている結果である。皮肉と溜息は極力封印し、それでいて碎けた調子で話さなければならない。簡単なよう
でいて、難しい所業なのだ。猫被り。

と、そこへ機嫌良く近寄ってくるのは、白衣に眼鏡を掛けた保険医だった。ひよろりと背の長く、優しいというよりは覇気が無い笑みが特長の人物。

柏木栄治。小中と一緒に、大学で再会を果たした旧友だ。実は天才的なクラッカーなのだが、『安定した職じゃないと予定が立て難いんだよ、ギャルゲーの』と豪語して教員免許まで取る彼のオタクスピリッツが恭一郎としては非常に残念な事ではあった。

出会いは昔に良く虐められていたのを助けたところからだった。火が付くと熱くなる人種の恭一郎は、栄治を助けた後、彼以外の友人を小学校で作らなかった。友人を虐めていた輩と、何で親しくしなければなるまい。幾ら恭一郎でも、青い頃はあるのだ。失敗という失敗は無いが。

なので、結果的に親友のポジションに彼は居るのだ。

「恭一郎。ノートパソコンの調子はどうだい？」

「文句あったら、とつくに言ってるっつの。んで、お前は昼休みだつてのに何してるんだよ。飯はどうした」

「そんなの栄養フレーバーだよ、ゼリーもあつたし。それよりもさ！ 今日発売なんだよ！ マジカルクルリちゃんのフィギュア！ボク、もう楽しみでさー！ 二日寝てないんだ！」

——栄治は、確かに生き方としては男らしいが、恭一郎がなりたく

ない人種である趣味に生きる男であつた。どうにも、他を棄てる事は恭一郎には出来ない。

「……で、それがどうした？」

「うわ、冷たいなあ。今日、僕の家遊びに来ないかい？ 妹も会いたがつてたし、一緒にあの精巧なフォームを舐めるように堪能しようよ！」

この男、顔はそこそ良いのだが、一本気（オタク的な意味で）な性格で損をしている。それ以外は、忍耐強く情に厚い人間なのだが、柏木の妹とも、良く顔を会わせる。内気そうな高校生で、容姿は良いのだが浮ついた話は聞かない。健気で良い子なのだが……。

「あ、今日もデートでそれどころじゃないか」

地雷、再び。

しかし相手が相手。殴ろうにも殴れない。

一気に沈鬱な表情を浮かべる恭一郎を見て、栄治は肩をポンと叩き、親指を立てた。

「大丈夫！ 二次元があるよ！」

——とりあえず関節を決めておいた。

「ぎゃああああああああ——ッ！ な、何するんだよ！」

「そのアブノーマルさを認知しやがれ」

そこまで強く技を掛けたワケでは無いのだが、解いてやるとしきりにその部分を擦りだす。相変わらず引き籠ってばかりなのか、貧弱な身体だ。

「……ところで、聞いた？ 例の連続失踪殺人事件」

神妙な声のトーンに、恭一郎も同調する。

「勿論だ。あの事件が無かったら、昨日の職員会議は起きてなかったし、忌々しいったら無いぜ。……で、何かあったのか？」

「ああ。ネット巡ってたら、ある掲示板で大炎上しててさ。まあ、それよりも僕的には新しいゲームの情報を仕入れたからさ、聞いてもらおうかと……」

「いいからその事件の内容について話せ。ゲームはその後で付き合
ってやる」

「ホントに！ やっぱ、恭一郎は僕の親友だよ！」

——偶に栄治の友人判断基準について深く知りたくなる時があるが、
先ずは話を聞こう。

「連続失踪殺人事件ってさ、犯行時刻が夜。襲われているのが全員
高校生。傷口から鑑定して、鋭利な刃物で喉元を切り裂かれたとい
うのが死因。ここまでは知ってるよね？」

「ああ。今日は俺が一人で街を巡回せにやならんが」

「ご愁傷様。でさ、ここからがホットなんだよ！」

何が面白いのだろうか。宝の地図を見つけた夢見がちな少年のよう
に目を輝かせて拳を握る栄治を半眼で睨んでやるが、気付いていな
いようであつた。

「噂なんだけど、犯人に殺されて死ぬ前に白いゴスロリの服着たピ
ンク髪の女の子が現れるらしいんだよ！」

「よし、病院行け。腕利きの脳外科紹介してやつから。モグリだけ
ど」

「僕じゃないよ！ 流石に三次元にそこまでは求めないって！」

問題なのはコイツなのではなかるうか。ここまで来ると廃人に近い。
『大賢者を目指しています』と合コンで豪語し、全員から（恭一郎
も含む）引かれていた勇者の悲願は本当に成就するかもしれない。

「その子は純白の剣になるレースの傘を持ってて、致命傷を負わさ
れていて苦しんでる人の首を一撃で刎ねてくれるんだってさ。あ、
そうそう！ これが掲示板の皆が考えた通称『白ロリ』の正体だっ
て！」

白衣の内ポケットから出されたのは、折り畳まれたA4のプリント。
広げてみると、そこには全身をその名の通り、白いゴシックロリー
タ調の服で包み、頭に飾り帽をちょこんと乗せ、傘を差して身を擦
り、こちらを大きな碧眼で覗いてくるキャラクターCGが印刷され
てあつた。ちゃんとピンクの髪であり、偶に栄治から見せられるど

のCGよりも秀逸で可愛らしい出来であった。

「可愛いよねえ〜！ 今度、これで本が出たら絶対買っね！」

「いやもうお前黙っとけよ」

「何でっ!？」

その後、二人連れ添って職員室まで行き、恭一郎は業務を片付けながら購買のパンを頬張り、栄治は携帯ゲーム機を弄りながらコーヒ―を飲んでいた。

五分もすれば業務も明日の分まで片付き、食事に専念できた。咀嚼していたメロンパンを嚥下し、次いでチョココロネの封を切る。

「ねえ恭一郎。そのチョコイスは意図的なのかい？」

「は？ 何だ、欲しいのか？」

「……ああ、赤い髪の少女とオタク少女が鮮明に浮かんでくるよ。そのパンの袋を見ると、何だか漲って来た」

「意味が分からん」

「カリモフって、良いよね！」

「何の略だっの」

そして、齧り付こうとした際、視線を感じて振り返る。

恭一郎の死角から、こっそりと忍び寄る影が一つ。

「……理事長。何してるんですか」

「え？ いやー……あはは。はーさんに、そのパンくれたりしないかな？」

目の覚めるようなオレンジ色の髪と愛らしい碧眼の少女——なのだが、年齢不詳の人体の神秘でもある。

ハノン・アルグラッテ。恭一郎が呼んだとおり、若いながらも琴乃音学園の理事長で、その容姿とは裏腹に、手腕と実績は、何でも裏の業界にまで知れ渡っていたらしい。

自らを『はーさん』と呼称しているところからも精神面の発達の心配をせざるを得ない。しかし、軽くだが口論で負けてしまった過去があるので、一目置いている存在であった。

ちなみに、彼女は子どもではないので嫌いではない。一応、尊敬も

している。

「良いですけど、食べた後はちゃんと歯を磨きましょう」

「はーさん、何歳だと思われてるのかな？」

「暴露してくれますか？」

「絞めるよ？ 権力的な意味で」

「すいません」

社会階級には従順な恭一郎であつた。

差し出されたパンを細い方から食べ進めていくハノンであつたが、パンを下に向けて食べている為か、太い方からチョコが垂れ始めている。

「……リアルで拝めるとはね、この萌えシチュ」

「お前ホント何なんだよ」

恍惚の表情で溜息を零す栄治を半眼で睨みながらも、なんだか微笑ましいハノンを自然と目で追っていた。

本当に、美味しそうに食べている。ただの菓子パンなのだが、彼女が食べているのを見ると、一流のベーカリーが作った代物に見えてしまう。それはきっと、その眩しい笑顔の所為だろう。

しかし食べ終わるのも早い。十五秒経過してもう三分の二が無くなり、残りの三分の一を口を開けて捻じ込む。

「むぐむぐ……」

リスのように頬張る様に恭一郎は苦笑し、パンの御供になる予定だった甘いカフェオレを手渡す。

遠慮する事無くそれで口の中の物を嚥下し、ハノンは満足気に弾けるような笑みを浮かべた。

「ありがと！ 会議だったから何も食べてなくて……」

「よく会議をすっぱかされているようですが」

「あははー……。だって、面倒だし……。い、いいじゃん、はーさんが一番偉いんだから」

——偉いから、会議に出なければ拙いのではないのだろうか。

しかし、サボりたい気持ちも良く分かる。人間、思った時に休むの

が一番良い。心にも、身体にも。

生真面目な人間は力の抜き所が分らずに早死にする。時間の使い分けが上手い輩と、二十時間ぶっ続けで勉強し続けている輩。前者の方が学力的にも人間的にも賢いのだ。

「まあそんなどーでも良い事は置いといて。昨日見ちゃったよ、はーさんは」

「……何をですか？」

「フラれんぼの恭一郎君」

「ッ!？」

——まさか、見られていたとは。

胸に去来するショックと負の感情の奔流に圧され、ガックリと頂垂れる恭一郎であった。

「どしたの？　うふふ、溢れる母性ではーさんが癒してあげようか？」

どちらかと言えば進む稚拙さではあったが、口には出さない。居た堪れないこの気持ち。自分の醜態を見られているとは、これ程までに苦しい事なのか。

初めての、経験したくも無い経験に身を苛まれる。もう、二度と醜態は晒すまい。

「いいじゃん、失恋くらい。良い相手が見付かるよ！」

「そうだよ、恭一郎には二次元——」

首筋に手刀を叩き込んで、とりあえず栄治を黙らせる。

「いやー……辛いですよ。職員会議遅れたくらいで何だつて話です」
「わかる。会議すっぱかしたからって、怒る事無いのにね。それよりも聞いてよ、はーさんなんか、お見合いの時『真性ロリじゃないんで』とか敬遠の言葉でバツサリいかれるんだよ？　ねえ、恭一郎君はブスとロリ、どっちが良い？」

「ロリ」

「じゃあ、結婚しよう！」

「承りかねます」

「何でっ！？ どーしてっ！？」

「二択が究極過ぎるんですよ……」

沈んだ気分が、そんなやり取りで浮上してくる。他愛も無い会話なのだが、エネルギーシユな彼女に元気を貰っているような気がした。「まあまあ、今度飲みに行こうよ！ 会議サボって飲むのはまた違ってくるから！」

「……じゃあ、暇だったら誘いますよ」

「うん、良し。それじゃ、はーさんは最低限書類を片付けるから！」

「お勤めご苦労様です、理事長」

「はっはっはー！ よきにはからえっ！」

こちらに向かつて敬礼すると、小柄な身を翻して職員室から消えていった。

同時に、職員の過半数が呆れたニュアンスを含む溜息を吐いていた。その容姿から、子どものお遊びにしか見えていないのである。節穴だらけの目をどこで養ったのか、溜息を吐いた者全員に聞いて回りたいものだ。

と、バーコードハゲが眩しい教頭が、シャープなフォルムの眼鏡を掛け直してこちらをレンズ越しに睨んでくる。

「あまり職員室で騒がしいのは感心しませんな、新堂先生。理事長殿の御守りをして頂くのはありがたいのですが」

普段なら、軽く受け流した理事長への悪口。相変わらずの粘っこく、嫌味を内包し凝縮したような声だ。

それがどうして、今はこんなに腹立たしいのだろう。——この、頭が冴え渡っていく感覚も随分とご無沙汰だ。

「……脳細胞がその髪みたくに死んでいらっしやるようで」
「なっ……っ！？」

——昨日の今日でこんな台詞を吐く事になろうとは。

（ど、どうするんだよ恭一郎！ 拙いよ、教頭先生だよ！？ どうするの！？ あの無駄に口論強いつていう……）

そんな耳打ちをしてくる栄治の声を無視し、恭一郎はどっかりと椅

子に腰を下ろした。

今朝誓った事など、もうどうでもいい。ここまで言っただけなら、徹底的に潰しておいた方が後に立ち回り易いだろう。

恭一郎の言葉に吹き出した数名の者へ咎める視線を送っていた教頭を、足で机を小突く音で振り向かせ、うろたえたような瞳を真っ直ぐに捉える。

——恭一郎は笑っていた。あまりにも不敵に、あまりにも余裕のある雰囲気醸して。その絶対的で、呑んだ者を硬直させるような雰囲気、教頭のペースを奪い、恐怖で侵食していく。

「人を見た目で判断してはいけませんね。確かに内面は外見に出るといったような戯言が存在しますが、あなたは鵜呑みにしているよ。うで。それなら、私の言う事も当て嵌まると思いませんか？」

「な、何が言いたいんだね！」

「ですから、最初から仰っているではないですか」

鼻で笑うような仕草をし、恭一郎は足を組み替えながら、呆れるように頬杖をつく。

「あなたの知能の低さはその髪のように乏しい、とね」

「ぐっ……」

羞恥の為か怒りの為か、或いは両方か。頭全体を紅くしていく教頭であったが、恭一郎の眼光に気圧され、段々顔が青くなっていく。

「……理事長の外見はあですが、反面彼女は聡く思慮深い御方だ。きつと浅はかなあなたの考えている事も知った上で、ここに置いてあるのでしよう。だから職員室の雰囲気を壊さないよう、ここに机を置かない。この意味が分かりますか？ 彼女は自分のマイナス面を考慮した上で、我々下の身分の者達に配慮なさっているのです。ずっと大人ですよ、彼女は。あなたのように、無駄な歳月を重ねていただだけの凡夫とは違って、ね」

いつの間にか、職員室中が静まり返っている。

静寂を保っていた時間は、恐らく分も無かっただろうが、長く感じられるものだった。

均衡を破ったのは、話の中心人物であるハノンだった。

「恭一郎君、はーさんの携帯知らない？ …… って、どしたの？」

静か過ぎる職員室の気配だけで、彼女は何をしたか悟ったのだろう。こちらの机に置かれていた白い携帯電話を掴んで、スタスタと出入り口へ戻っていく。

ふと、一度だけ振り返り、ハノンは恭一郎へ微笑みかけた。そして、口をゆつくりと動かす。

——『あ・り・が・と、ね？』

他の教職員達に見られないよう、恭一郎は彼女へウインクを投げかけるのだった。

「もー冷や冷やしたよ！ …… 君は馬鹿か！」

「お咎め無しだったんだ、別に良いだろ。それと何だよ、その無駄に低くて良い声」

放課後、特に罰も無かった恭一郎達は、途中まで一緒に帰っていた男二人で歩くのは虚しいものを感じるのだが、一人だともう少し虚しかったかもしれない。いや、逆に男が隣に居るから虚しいのか。

缶コーヒーを口に運んでいると、隣でイチゴ牛乳のパックをストロ―で啜っていた栄治が真剣な面持ちでこちらを向いた。

「恭一郎、気を付けて」

「何だよ。男からそう言われても、キモいだけだから」

「キモくていいから忠告させてくれよ。もしかしたら…… 殺されちゃうかも知れないじゃないか」

「——ハッ。誰に向かって言ってたんだ？」

ニイ、と口の端を吊り上げ、好戦的な笑みを浮かべる恭一郎。

並ならぬ殺気だったオーラと見る者を竦ませる迫力を彼は纏い、その逞しい拳をゆっくりと握った。手中で空になったスチール缶が一瞬间で握り潰される。

「……相手は刃物を持ってるんだよ？」

「白口りってヤツが犯人じゃないんだろ？」

「うん。男だつて聞いたけど……」

「なら、問題ねえな。刃物持ってるアホは百人以上半殺しにしてっから」

「……ちなみに、拳で立ち向かってきた相手は？」

「さあ？ 殴り過ぎて覚えてない。空手の段位持ち、剣道五段から襲われても無傷だったから、心配すんな。荒事はお前よりよっぽど向いてる」

「……そうだね。うん、心配した僕が馬鹿だった」

高校時代に打ち立てた伝説の数々を所有するこの肉体は、今だ健在だ。

プロボクサーでも反応できない拳の速度と、短距離専門選手を悠々と抜き放つ驚異的な足のバネ、様々な武術を齧って鍛え抜いた必殺の蹴り。肉体も釘バット程度ではビクともしない。

木刀を持てば実家の方針で無理やり習わされた居合いが本領を発揮し、西日本と東日本勢力の最強を決める大喧嘩——『選定の戦い』の時、東陣営の頭を務め、自らバイク単騎で突撃し、同じく突撃してきた西陣営の男と引き分ける。この大喧嘩は全国で語り継がれているようであった。

「見回りはバイクで行くのかい？」

「歩きだ。夜あのバイクに乗ったら、絶対に舎弟どもが付いて来やがる」

「うわぁ……」

想像したのか、こういう事が苦手な栄治は顔を蒼くしてこちらから半歩距離を取った。

「お前も、何かあったら俺を呼べよ。大抵の事は何とかなるから。」

しょうもない事は自分で後始末すべきだがな」

「そ、そうするよ」

そして、路地で栄治と別れた後は、街の巡回だ。

とは言っても、適当にぶらぶらするだけで良いらしい。昨日まで巡回していた先生からのありがたい情報を得ていた恭一郎は、とりあえず腹ごしらえに近くのファーストフード店に入る。ワイルドバーガーと言う、有名なチェーン店だ。味は悪くは無いが、少々塩気がキツイのは、ファーストフードの宿命なのかもしれない。

恭一郎が注文したのは、期間限定の巨大バーガーに、ポテトLサイズ、コーラMサイズ。

しかし、運ばれてきたのはそれらとコーラのLサイズ。別に、ドリンクはサイズ変更を頼んでいないが……。

「さ、サービスです！」

「お。サンキューな、可愛い店員さん？」

ウィンクを飛ばしてやると、蕩けそうな笑みへと変貌する、確かに一般よりは可愛い店員。こういう気障っぽい台詞も、あのスマイルと共に、バイトの先輩から身につけさせられた。いかんせん、どうにも三枚目染みている。

席を探したのだが、何だか込み合っているようで、空いてる席は見当たらない。

と、

「あ！ 恭一郎君！」

甲高い声が恭一郎の耳に届き、声の発生源へ自然と顔を向ける。

ポテトやシェイクに囲まれて幸せそうなハノンの姿がそこにあった。口元にソースやパン屑をベツタリ付けている様は、外見相応の子どもに見える。

トレイを彼女の正面に置いてから、とりあえず会話の火蓋を切った。

「食べ過ぎですよ、理事長」

紙ナプキンで柔らかい頬に付いていた汚れを取っていく。

「ん、ありがと。そう言えば、何で恭一郎君がここにいるの？」

「俺がファーストフード食ってたら、可笑しいですか？」

「うん。何か、高級フレンチでボンキュッボンな女の人とワイングラス傾けてそうだし」

「あー……無いですね。女の知り合いなんて、それこそ理事長しか……」

「ちよつと、恭一郎君。こんな可愛い子を前に、敬語でしか会話できないの？ プライベートだから、『はーさん』って呼んでよ」

「……一応巡回中で絶賛業務中なんですが」

「グチグチ言わない。はい、敬語止め！」

「……ま、良いけどな」

バーガーの包みを開きながら、恭一郎は溜息を吐く。

大口を開けて齧り付くと、味の薄いドレッシングと癖の無い和風ソースが口の中で絡み、脂ギツシユなハンバーグを食べやすくしてくれているのが分かった。咀嚼しているうちに、卵の風味が混じったソースで生かされ、シャキシャキのレタスの歯応えが何とも小気味良い音を奏でる。それらを上手く纏めるブレッドもふわふわで、万人受けはしないだろうが恭一郎の好みではあった。

「ねえねえ、『白ロリ』についてだけど」

思わず噴出しそうになった。まさか、そこまでメジャーな通り名だったとは思わなかった。

「？ どしたの？」

「いや、今日友人からそれを聞いたからな。ちよつと驚いただけだ」

「んじゃ、説明プリーズ」

「ああ」

とりあえず、思い出した事を並べてみる。

「その名の通り、白いゴシックロリータ調の出で立ちのピンク頭だ。ピンクは……何か、淡い感じだったが、まあ本物かは分らん。レィスの傘を持っていて、剣に変じさせる事が可能らしい。妄想は妄想に過ぎんが、かなり可愛い感じだった」

「ネットの画像？」

「ああ、プリントアウトしてくれたのを見てな」

「それじゃ、話が早いなあ。これ、渡しておくね？」

握らされた物を見て、思わず目を瞠った。

大型のナイフ。恭一郎は貴金属類も詳しいのだが、見た限り純銀やプラチナ等で装飾を施されてある。鞘だけで途轍もなく高価な代物だろう。教師の任給で六ヶ月ぐらいか、それ程の価値がある。

こんなファーストフード店で抜こうものなら、警察沙汰になるだろう。何でこんな物を手渡してくるのだろうか。

「もしかしたら、襲われちゃうかもしれないしね。あげちゃう」

「だが、はーさんはどうするんだ」

「モーマンタイ。はーさんはデザートイーグル持ってるし」

――銃刀法はどうした。ちなみに、デザートイーグルというのは、ゴツイハンドガンで、その威力は他の追随を許さない。重量も半端ではないので、到底少女のような外見のハノンが持てるとは思えないが。

「だーいじょうぶ！ 警察に捕まっちゃった時はね、はーさんの名前を出せば万事解決！」

果てしなく不安であったが、厚意を無碍に出来ず、スーツの懐の隠しポケットにしまっておく。

確かにリーチの長い得物の場合、流石に拳だけでは辛い。白刃取りを敢行しても良いのだが、いかんせん『白口リ』の腕前は未知数。迂闊な事をすれば、最悪真つ二つだろう。

コーラをストローで啜った後、まだ中身の残っているポテトの箱を掴んで、恭一郎は立ち上がった。

「んじゃ、俺は業務再開するから。本当に気をつけろよ、はーさん」
「はーい！」

元気良い挨拶に不安を感じるのは、心配性だからなのであろうか。やり場の無い心配を溜息に乘せて吐き出してから、夜の街に恭一郎は消えていった。

宵闇に包まれた街並み。

喧騒が遠く聞こえる高層ビルの屋上に、その少女は座っていた。

純白のゴシックロリータ調の衣装を身に纏い、雨が降っているわけでもないのに傘を差している。奇怪な光景であったが、それは彼女の顔を見れば幻想的なものへと様変わりする。

愁いを帯びたような蒼い瞳に、整った顔立ちは溜息を吐く程に美しく、また可愛らしい。白い肌は柔らかそうで、ピンク色の髪には少しだけ縦ロールが入っている。

その大きな瞳で、無機質な輝きを灯し続けるネオンを見つめていたが、突如立ち上がると、何かを呟く。

「……行かなくちゃいけませんね」

転落防止用の柵に、跳躍するだけで乗ってしまう。吹き荒ぶ生暖かい風を浴びながら、少女は夜の空に身を躍らせる。

「……大丈夫。私なら、ちゃんと出来ます」

その言葉が誰に向けられているのかは分からない。

——答えは、彼女以外の誰も知らない。

一章 二つ名と事件

一章 二つ名と事件

捜査開始は西日の差す午後六時だったが、今は東から月光が注ぐ午後九時。今現在に至るまで、不審人物ゼロ。眉唾物である『白口リ』も、当然未確認。

——これ程までに業務熱心な教師がいるだろうか。いや、居るまい。そんな事を考えながら、恭一郎は桜並木の美しい、工業団地近くの公園を見て回っていた。ポテトはとくに食べ終え、ゴミ箱行きになっていた。その代わりに、自販機で購入した無糖の缶コーヒーが手に握られている。

別に巡回するまでも無く、街はいつもの表情を見せている。

騒がしかった喧騒も、ここまで離れば何も聞こえなくなっていた。海に近い所為か、心落ち着かせる潮騒だけが、辺り一帯に静かに響いていく。

ふと、春先の生暖かい風が吹き、微かな桜の香りと潮の匂いが鼻腔を優しく撫でる。

空を見上げれば、満天の星空。何て趣き深く、ロマンチックな光景だ。——相手がいれば。

「……帰るか」

途端に虚しくなってしまった。

踵を返し、廃工場前を過ぎ去ろうとした時だった。

——闇の中で、何かが動く気配を感じ取る。

それは刹那とも呼べる時間ではあったものの、何度も感じた殺気を孕んだものであった。間違えようも無い。

自然と身体は廃工場の中へと向かっていた。

夜目が利くのも健在。忙しなく鋭い瞳を動かし、動く物体を視界に

捉える。

足音を極力殺しながら目標へ接近していく。右手は懷に伸び、更左手は腰のペンライトへと伸びる。

コンテナブロックの影に隠れたらしく、しかし急いだ為か緊張の為か、荒い吐息がこちらにまで聞こえてきた。

何故か、恭一郎はそこで大袈裟に足音を立てて、ゆっくりと近付いていく。

傍から見れば、正気を疑うような行動だ。自分の居場所を教えるようなもので、ハッキリ言えば自殺行為に等しい。

しかも、気楽な調子で犯人と思わしき男性へと声を掛ける。

「お前、例の殺人犯だな？」

「……だ、だから何だ！ て、テメエも殺すぞ！」

「スポーツバグ、持ってたな。死体はそこの中か？」

「馬鹿野郎が。生きてるぜ？ まあ……すぐに殺すし、お前もすぐに殺す！」

そんなやり取りを行いつつ、恭一郎は声の反響具合から相手の距離を測っていた。

成る程、こちらの足音で向かっている場所を知っているのか、一番近いコンテナの影にいるらしい。

二メートルと少しの高さのコンテナを見上げながら、恭一郎は先程から握っていたナイフより手を離す。

「自首する気は？」

「な、ない。……は、ははははははッ！ 先ずはお前からだ！」

俺の狩りの時間を邪魔したんだからなあ！」

「狩り？」

「俺は『狩人』なんだよ！ 黒姫様がそう仰った！ だから俺は『狩人』だ！ 黒姫様の祝福を受けてない貴様は、当然俺に狩られるのさ！！」

——『黒姫』という人物が首謀者……なのだろうか？

相手は多分、新手の悪質宗教団体だろう。それか、麻薬中毒者か。

どちらにせよ、異常者には違いない。

それからは静かな緊迫状態が続いた。しかし、恭一郎の足はだけは止まらず、ゆつくりと狩人と名乗った男へ向かっていく。

後、五メートルになった瞬間だった。

暗闇から異常な程の敏捷力を見せ、狩人は恭一郎をナイフで突き刺した。――筈だった。

「何ッ!？」

――空振り。

まさかの事態にあたりを見渡すのだが、人影は無い。

と――狩人が背後に気配を感じたのと同じ時。

「がはあッ!？」

恭一郎のしなやかな足から繰り出された蹴りは、峻烈に男の横っ腹を薙ぎ飛ばす。

――あの足音からが、全て布石だ。

位置をわざわざ教えたのも、攻撃を誘う為。声を掛けたのは、相手の位置を知る為。後者は、前者の役割も担っている。

後五メートルになった時点で、恭一郎は音も無く、コンテナに手を掛けて飛んでいた。

相手が動いていないなら落下の際にアームハンマーを叩き込めば良いし、動くのならば相手の背後を取って攻撃すれば良い。

状況をも味方に付けていた恭一郎の掌で、狩人は踊っていただけなのだ。

感触から言つて、肋骨が何本かやられているに違いない。何とか這い起きようとしている狩人へと近寄り、執念深く握っていたナイフを踏み潰して、へし折る。

「て、めえ……」

恨みがましそうにこちらを睨んできたが、その表情が凍りつく。

「あ？ 誰に向かって喋ってんだコラ」

恭一郎は革靴で、狩人の顔面を抉るように蹴り込み、悶絶している頭を踏み躪る。

「どうしてやろうか、屑男。警察に引き渡すのは、サンドバックして臓器売っ払ってからでも遅く無えよな。おい、どうなんだよ」

「ひ、ひいッ!？」

恐怖に滲む狩人の顔。狂気めいた恭一郎は、歯を剥いて笑い、声のトーンを落とす。

「ははっ！ 最高じゃねえかよ。豚みたいに鳴きやがって。……覚悟、出来てんだろうな」

「た、助け……」

「何度その言葉を聞いた？ テメエ愉悦に浸ってたんだろ、それ聞いて。さて、どうしてやろうか……」
改めて悩む仕草をした。

——刹那だった。

「か、は……っ!？」

突然血飛沫が男の喉元から噴出する。

一陣の微風を伴って、静謐に胴体と首が泣き別れた。あまりにも速く、現実味が無い出来事。

約五メートル先で、コッ、というブーツの音が聞こえる。反射的にそちらを向いて、目を瞠った。

——『白ロリ』だ。

先ず目が行ったのが、彼女の身長を越える純白の剣。スタイリッシュな両手持ちなのだが、彼女は片手で悠々と扱っている。常識的に考えて、小柄で華奢な少女が片手で持てるような剣ではない。

ゴシックロリータ調の服には血も付いていない。その様は、暗闇に咲く幻想的な白い花のイメージを掻き立てる。

ピンク色の長い髪、白い肌、整った可愛らしい造作。全てが栄治のを見せてくれたCGに酷似している。違うといえば、剣の柄元にレースのリボンがはためいている程度か。

——不覚にも、一瞬だけ見惚れてしまう。

首を振ってその気持ちを振り払い、とりあえず確認しておく。

「……『白ロリ』というのは、お前か？」

「『白口リ』？ この衣装なら、そうですね？ 可愛いですよね！」
恍けてみせる少女。しかし、彼女がああ『狩人』の喉元を切り裂いた。

——こいつは、殺人犯だ。

警戒を強める恭一郎を余所に、『白口リ』はフランクに話しかけてくる。

「ありがとうございます！ あなたが『狩人』さんを止めてくれてたお陰で、楽に殺す事が出来ました！ いやあ、お兄さん良い人ですね！」

「……狩人とは知り合いだったのか？」

「いえ、全然。全くの初対面ですけど……」

「何故殺す必要がある。コイツは俺と警察が裁く予定だったんだ」

「と、言われましても……。ほら、よく言っじゃないですか。『お菓子はお菓子屋』って」

——普通、『餅は餅屋』では無いのだろうか。

何にしても、その言葉から、『狩人』と同じように、頭が逝っている人物であると判断できる。

懐のナイフの存在を確かめて、恭一郎は問い掛けを続ける。

「コイツが殺していった後に現れて、死に掛けの人間を殺して回っていたのもお前か？」

「はい、そうです。だって死に實際の人って可哀相じゃないですか。まあ、私達の戦いに巻き込まれてしまった哀れな一般人って事で！」

「……そうかよッ！」

——限界だった。

駆け出しながらナイフを抜き、『白口リ』へと振るう。

闇に閃く白刃を白刃で弾き返して、彼女は慌てたように声を上げた。

「な、何ですか！ 一般人の癖に、やる気ですか！？」

「死者を侮辱すんじゃない。やっぱガキと女は最悪の組み合わせだな、反吐が出る」

「ええっ！？ 自慢じゃありませんが、容姿は結構自信あるんです

よ!？」

「黙れ電波野郎」

刃を刹那に数度交え——やはり恭一郎が後方へ跳ぶ。

分りきった事ではあるが、こちらの短剣と向こうの剣とでのリーチの差が大きい。加え、彼女の攻撃速度には目を瞠るものがある。正直言えば、予測しておかなければ、体が付いていけない。重量ありそんな剣を、片手で振り回しているのだから、恐ろしい事この上無い。

しかし、彼女は剣術に関しては素人同然で、勘を頼りにぶん回しているだけ。斬線は無秩序で、荒過ぎる。

彼女は自らの攻撃を防がれた上、攻撃を仕掛けたこちらの技量に驚いたらしい。目付きを変えて、こちらを真剣な眼差しで見つめてくる。

「……お兄さん、一般人ではないようですね。何者ですか？」

「出世街道驀進中の、ただのイケメンだ」

「うわぁ……」

「引くな。ちょっと悲しかったろうが」

右足を半歩引いて、ナイフを適当に構える。刃物は刃物を防ぐ為であり、ピアノを習っていた恭一郎は両利きである。つまり算段は、右の刃で剣を受け流し、左の拳で目標を気絶させる事。

思い描いたように上手く行けばいいのだが、先程の身のこなしは主人公補正でも掛かったかのように凄まじいものだった。先ず、そのスピードに慣れなければならない。

と、こちらのペースを乱すつもりか、彼女は剣を構えたまま、話しかけてきた。

「私、戦いって長引かせるものじゃないと思うんですよ」

「ほっ」

「ほら、ゲームでもアクション物なら十五分も掛からずに倒せるラスポスガ、コマンド制やタクティクスなら一時間オーバーってザラじゃないですか」

「や、ゲームじゃないから」

「喻えの話です。と、言うワケで、今から必殺技を繰り出そうと思うんですが……」

物騒な事をほざいているが、この状況から動くに動けない。

あの剣から繰り出される。それはつまり、相当な威力どころか、人が独り死ぬ程度ではすまないのではないのだろうか。栄治がよくやっているゲームは、刹那に三十六もの斬線を刻み付けたり、刃が輝いて必勝を齎してくれたりするものを見た事があるのだが、あれベルとなれば必殺と呼んで良い。

戦慄し、恐怖で体が少し震えるが、動けるように頭で念じる。

「じゃあ、詠唱から行きますね。ちよつと待っててください」

「……」

何か、その場でぶつぶつと呟き始めた。しかも、かなり長いようである。

恭一郎はしばし虚空を見上げていたが、何か見つけたように、ナイフの鞘を握ったまま叫んだ。

「……輝く光の塔よ。その頂に——」

「あ！ 良い男！」

「嘘っ！？ マジですかっ!？」

芸能人を一目見ようとする意地汚い一般人のように首を忙しく振る少女だったが、居ない事が発覚すると、剣をこちらに向けて非難を飛ばしてくる。

「居ないじゃないですか！ 嘘吐きさんですよ！」

「俺は嘘が嫌いだ」

「嘘吐きまくってますよ！」

「ほら、俺ってイケメンじゃん」

「確かにそうですけど——」

瞬間、彼女は前のめりに倒れてしまう。

鞘を高い軌道に乗せて、『白口リ』へ向けて放ったのだ。綺麗な放物線を描き、どうやら彼女の首元へ落ちたらしい。少しでも隙があ

ればよかったのだが、大きな収穫だ。

「……どーすつか、この後始末」

転がる血だらけの死体。未開封のスポーツバッグ。泡を吹いて倒れている白ロリの少女。

——とんだ時間外労働であつた。

「あの一……」

所在無さ気な『白ロリ』の音が、ボロアパートの一室に虚しく響く。厨房と思わしき所からは、何かを炒めている音が聞こえる。それととても香ばしく、涎を誘う美味そうな匂いが漂っていて、少女のお腹は空腹への抗議の声を上げた。

その音を聞きながら、恭一郎は最大火力で炒飯の仕上げに入る。鉄製の中華鍋の中には卵と白飯が混ざったものがあり、そこへ解した蟹の缶詰を加えて炒め、更にレタスを加えてから、五回程宙へと舞わせた。手並みはそこら辺の主婦よりは良い。

出来上がっていたコンソメ味の春雨スープと共に食卓へ持って来る。——一人分だけ。

恭一郎は満足そうに椅子に座り、二度頷きながら料理を眺める。

「蟹レタスチャーハンと春雨スープ。流石は俺だな。良い出来映えだ」

「あの一……」

再度の呼びかけに、炒飯へレンゲを突っ込んでいた手を止めて、恭一郎は顔を上げる。

「何だ。この俺の料理の腕にケチを付ける気か？」

「いや、それは大変美味しそうなんですけど……。それよりも、何で私、縛られてるんですか？」

そう。『白口リ』は恭一郎の対面の椅子に、グルグル巻きに縛ってある。ビニール紐で。

「色々聞きたい事があるからな。逃げないように、それから抵抗されないように」

「それと、お腹ペコペコな私なんですけど……」

「うっわ。この炒飯、超美味い。パラっとしてて玉も無いし最高だな」

「鬼い——っ！ 酷過ぎます！ 縛った拳句に拷問だなんて！ 殺人より卑劣ですっっ！！」

「いやあ、飯が美味くて仕方が無いな！」

「分かりました！ 質問に洗い浚い吐きますから！ ご飯食べさせて……！」

溜息を吐き、恭一郎は暖かい炒飯の乗ったレンゲを、彼女の口の中に突っ込んでやる。

「むぐむぐ……。……………」

黙々と咀嚼する彼女だったが、その表情は次第に驚きに満ちたものへと変わっていった。

「どうだ」

「……すっごく美味しいです！ 味気の無いゼリーとか固形食糧とかとは比べ物にならないですよ！」

「そーだろうそーだろう。で、この続きが食べたければさっさと話せ。言わんと料理が冷める一方だぞ」

美味しさを確認させてからの放置。まさに鬼畜である。

従順にならざるを得なくなった少女は、小首を傾げて尋ねてきた。

「……何を話せば？」

「先ずは名前だ。飯は待つといてやるから」

「アンシエラス・ウエルカントです！ 十六歳です！」

「……？ 鐘の音じゃないのか？」

「発音の問題です。私のいた所では、あまり濁点がつかなかったものですから」

「んで、アンシエラス。お前の目的は何だ？」

「えっと……『二つ名』を与えられた一般人を駆除する事です」

「その辺りを詳しく頼む」

ビニールヒモを、箸立てに突っ込んであったテーブルナイフで切り裂く。アンシエラスは暫く服を確かめていたのだが、何も無かったようなのでこちらを向き、真摯な姿勢で説明しだす。

「私、一応高位な存在なんですよ」

「炒飯を前に涎を垂らしていた誰かさんがか？」

「うつ……。い、いくら高位な存在だからとはいえですね、空腹には逆らえないわけで……」

「いーから次いけ。冷めるぞ」

あなたが皮肉を、とても言いた気に視線をこちらに向けるが、飯が冷めるのを懸念したらしく、再び口を開いた。

「それで、『二つ名』というのは――」

「さっきの『狩人』みたいに、確か『黒姫』なる人物から任命された一般人だろう。そして、固形食糧とか言ってたな。ああいうのは大抵、大型の傭兵組織が配るものだ。その『黒姫』にもだが、お前のバックにも相応にデカい組織がついている。その組織の目的は『黒姫』の手駒を殺し、彼女を殺す事。OKか？」

「何で事の全容を知ってるんですかつ！？」

「正解か。俺の勘も、捨てたモンじゃないな」

「鋭過ぎです！ 何なんですか、あなたは！」

「おっと、俺が名乗っていなかったな。失礼」

スーツの胸ポケットから名刺を取り出し、渡す。社会人の礼儀だ。

「新堂恭一郎だ。琴乃音学園の教師をやってる」

「ただの教師さんが私の剣を受け止めてたって事ですかつ！？」

何だか愕然としているようであったが、恭一郎には状況を纏める時

間が出来て好都合だった。

先程の説明で表にはしていなかったが——『二つ名』には、その能力を特化させる事が出来るのではないだろうか。

例えば先の『狩人』。身体的能力の向上が認められ、闇のほぼ視界ゼロの中、こちらを目視していた。元来、自然の中で生き、夜の狩りも多い為、『狩人』は目の良い存在だ。一般人には見通せない暗闇も、『狩人』の特徴であれば説明できる。

その上、気配断ちも素人では無かった。武術を齧った、元から勘の良い恭一郎でも、微弱にしか感じ取れなかった程だ。並大抵ではない。

しばし放心していたアンシエラスだったが、ようやく戻ってきたようである。整った顔を歪め、不服そうに恭一郎を見てから、大きな溜息を吐いた。

「……それで、他には何が聞きたいんですか？」

「お前の上司の電話番号」

「——うえええっ!？」

その言葉を飲み込むや否や、猛烈な勢いで手をバタバタさせる。物凄く焦っているらしく、ヒラヒラの服のどこからか、何か名刺のようなものが落ちていった事にも気付いていない。

こっそりと、恭一郎はそれを足で引き寄せる。

「じよ、じよじよじよ上司さんは今お休み中だと思いますよ? はい、それはもう低反発枕に埋もれて泥のように眠っている事間違いないし——……ところで、つかぬ事をお聞きますが、その手にお持ちになっていらっしゃるのは……」

「携帯電話だ」

「あ、あのー……何で、取り出すんですか？」

「いや、面白いものが見付かったからな」

白い電話番号の書かれたカードをちらつかせてやる。

「あーっ!? それをどこで!? まさか、私が寝てる間に体中をまさぐ——はい、すいません。ご飯を片付けようとするのは本

当に止めてください」

「お前みたいなガキ、襲うかよ……」

半眼で「子どもって言わないで下さい！」と喚き散らすアンシエラスを睨みながらも、指は容赦無くボタンをプッシュし、通話画面に移行する。

「アンシエラス、お前は先に飯食ってろ。キッチンにお前の分を置いてあるから」

「わーい！」

恐らく、長くなるだろう。そんな気配を知らずの内に感じていた。耳元に携帯を持っていき、相手が出るのを待つ。

数回のコールの後、繋がったようだ。

『あなた、アンシエラスさんではありませんね？』

いきなり胆を冷すような発言をしてくれた。

柔らかく、穏やかな口調ではあるものの、どこか威圧感に満ち溢れている。そんな声だ。声の主は女性で、多分年は……十代、だろう。やけに落ち着いているが、これも勘である。

動揺を悟られぬように、恭一郎は口を開いた。

「どうも初めまして。『白口リ』さんは今、蟹レタス炒飯を食べてますが……」

至福の表情を浮かべている向かい側のアンシエラスは、会話の邪魔をしないように手を振って「サイコーです！」とアピールしている。『それはどうも、ご迷惑をお掛けして……』

「いえいえ、とんでも御座いません」

これでは保護者同士の会話だ。

『ところで……どなたでしょう？』

「通りすがりのイケメンですが、何か？」

『ふふふつ、死にますか？』

——背筋に悪寒が走り、思わず竦み上がってしまう。

油断していた自分も自分だが、この少女……今までであったどんな人物よりも恐ろしい。

だが、ここで挫けてはならない。

自分を律しつつ、恭一郎は先程と変わらぬトーンで話し出す。

「それよりも、少し確認したい事がありまして」

「その前に、お名前を伺いたいのですが」

「質問に答えて頂ければ、答えましょうか」

「……わかったわ。フランクにいきましょう。で、質問というのは何？」

「テメエ人殺しの組織作って何企んでやがるんだコラ」

ドスの利いた低い声が、向かい側にいるアンシエラスを縮み上げらせる。

フランクに。その案には賛成だ。敬語というのはどうにもむず痒い。それに、年下に使うのは相当苛々するものだ。

一拍置いて、少女の声が聞こえてくる。

「……人殺しの組織ではないわよ？ それにしてもあなた、随分と事情を飲み込んでいるようね。アンシエラスさんが喋ったのかしら？」

「俺はガキが嫌いだな。あの電波女には、推測を並べて確認を取っただけだ」

「あら、その割にはご飯を作ってあげるのね？」

「ガキは嫌いだが差別はしない。まあ、一応紳士だからな」

「……………」

「その沈黙は何だ？」

「雄弁は銀、沈黙は金ですよ？」

「まあ、それはいい。質問が逸れた」

「興味が無いの？」

「どうせ女の子を脅すような輩が紳士を名乗るとは片腹痛いって思ってるだろ」

「……あなた、有能ね。ウチに来ない？」

「国家公務員以上の肩書きが貰えるのならな」

「……実際に会って話した方が良さそうね。そちらの携帯電話に、

地図の画像を送付しておきます。そこにいらして下さい」

「ああ。……春雨をスプーンで掬おうとしている馬鹿にも言っておけば良いのか？」

『ええ、ありがとう。では、明日の午前九時に』

「良い夜を」

『ふふっ、あなたもね？』

通話を切り、一息吐く。

——かなりのやり手だ。流石に口論で負けはしないが、彼女の含蓄は思ったよりも深い。そして、奥底に感じた気性は『我俣』。厄介な相手である。
で、

「……上手く掬えません！」

「まだやってたのか……」

半べそを掻きながら、アンシェラスは未だに冷めたスプーンへとスプーンを突っ込んでいた。

二章 金髪の悪魔

一章 金髪の悪魔

「お、お目覚めですか？」

「……そのマジックペンは何だ？」

「えっと……えへっ！」

起きるなり、マウントポジションを取られるまでは容認できるのだが、手に持ったペンの存在が神経を逆撫でた。

とりあえず彼女のペンを奪って手首を掴み、体位を逆転。彼女をうつ伏せにソファへ叩きつける。

「わーっ！？ 何するんですか！」

「お前、とりあえず額に肉は決定だが、他にリクエストあるか？」

「ま、まだやっていませんから！ 平にご容赦を……！」

「……お前は修学旅行の旅館ではしゃぐ異常なテンションのガキか。下らん真似しやがって……」

朝の恭一郎は相当機嫌が悪い。

昨日よりは幾分マシであるが、決まって異常にローなテンションになっってしまうのだ。

低い声に若干ビビりながらも、アンシエラスは果敢に口論を展開する。

「こんな下らない事でも、私にはとても大切なんです！」

「ほう」

「端正な顔って歪めたら面白いじゃないですか！」

「……お前も結構端正だよなあ。面白いんだろ？ やらせろよ」

「わ、ちよつと!? や、そんなもの顔に近づけないで下さい!

あ、いやーっ! 侵されるうゝ!」

「ぶっ殺すぞお前」

首根っこを掴んで猫のように持ち上げてみる。

「あ・の・な。俺の血圧は普通だが寝起きは頭が回らんから苛つくんだ! 朝飯用意してやるから黙ってる!」

「い、イエス……です……」

舌を打ちながら台所に向かい、冷蔵庫からベーコンと卵二つを取り出して、手早くベーコンを炒める。その間にレタスを千切つてとトマトを適当に切り、サラダを完成させた。

油がベーコンから出てきたら、そこへ卵を片手で割って落とし、少量の水を加えて蒸し焼きにする。

適当な皿を用意する頃には半熟で出来上がっている。盛り付けて、食卓に置いてやると、子犬のようにアンシエラスがやってきた。

「うわあ! 美味しそうですよ、恭一郎さん!」

「……そりゃ良かったな。さっさと食え。確か、ここにパンがあったはず……」

バターロールの入った袋を取り出し、食卓へ放る。

封を切つて、二人はそれを口に運んだ。

「……牛乳忘れてた」

恭一郎は、バターロールを口に咥えたまま、牛乳瓶を取ってくる。戻ってくる頃には、アンシエラスは一人でサラダを平らげていた。

「……オイ」

「あ、サラダ頂いちゃいました!」

——別に草食獣でもないのだから構わないが……一言くらいは確認を取れよ。

その言葉を飲み込み溜息に変換して、もそもそ朝食を再開する。

カリカリのベーコンと卵。パンを咀嚼して、一気に牛乳で流し込む。

「ザ・十秒メシ」

「もつと味わいましょうよ! これ、本当に美味しいですよ!」?

「俺が作ったんだから当たり前だ。自分で作って不味いなら、今頃三食惣菜だっつの」

と、違和感に気付く。

いつもならスーツに着替えている時間だ。今の恭一郎はグリーンチエックのパジャマに身を包んでいる。気が引き締まらないのは、その所為か。

「あの……」

「何だ」

「何で上半身裸になっていらっしやるのでしょうか？」

「着替えるからだ」

「た、遅いですね！」

「だろう？ 体育教師でもあるからな」

恭一郎のストリップは止まらない。

結局、ズボンまで手に掛けたところで、アンシエラスが走り去っていった。

「ど、どうしてそんなにデリカシーが無いんですか！ 普通、男の人が部屋を出たりするものだと思います！」

「ここは俺の家だ。それに、俺の肉体美を裸眼で焼き付けられたんだ。光栄に思え」

「何でそう自信満々なんですか……」

「ハッ！ 自分に自信を持てない奴が、他人にモノなんか教えられるかよ」

——正論ではあるのだが、こう、やりきれない感情がアンシエラスの中でとぐるを巻いていた。

「ほれ。もう着替え終わったから、準備しとけ」

「……納得いきません」

膨れっ面のアンシエラスを宥めながら外のガレージのシャッターを上げる。

ついて来た彼女のお気に召したらしく、目が爛々と輝いている。その視線にあるのは、恭一郎のバイクではなく、瀟洒さの欠片も無い

中古車だった。

「おおおおおおおっ！ エイトシックスですよこの車！ 峠を走ってそうです！」

「いや、こっちのバイクな」

白いヘルメットを、無駄に興奮しているアンシエラスへ手渡ししながら、恭一郎はバイクに鍵を差し込んで、アクセルを吹かし重低音を響かせる。

「早く跨った方が良いぞ。約束の時間まで、もう時間が無い」

「えっ！？ 優雅とはいきませんでしたけど、結構のんびりしてたじゃないですか！ ……後何分なんですか？」

「四十五分。因みに、片道は十五分だ」

「三十分余裕があるじゃないですか」

「社会人は余裕を持って行動するのさ。レディを待たせるのは、紳士としてではならん」

「……男の人だったら？」

「三時間待たせてやる」

「鬼ですね」

アンシエラスを前方座席に寄せ、包み込むようにしながら恭一郎はバイクを走らせる。

都会と田舎の狭間のような場所だ。今の時間帯は、あまり混雑しない。

快適にバイクを走らせていると、アンシエラスが感心したように声を上げた。張り上げないと聞こえないので、大声で。

「早いですね！ それに、風が気持ち良いです！」

「ヘルメットがあるのが難点だが、通気性も良いだろ？ それ」

白いフルフェイスメットは一応特注品で、極力軽く、それでいて丈夫に仕上げてある。客人を乗せた際、頭の負担にならないことを重きに置いて作られたものなのだ。

しかし、恭一郎の黒いフルフェイスメットは、既製品よりも少し重い。ファインセラミックに防弾ガラスを使用した、ライフル弾を喰

どちらも昔 バイク整備をしている舎弟から貰った物だ。感謝に頭を下げたら、「滅相もないっす!」と土下座された記憶がある。ともあれ、バイクは順調にその道程を進んでいく。

「はへ？ あー……スルーの方向で」

瞬間、バイクを大きく蛇行させる。

「ああ、地元警官とは顔馴染みだから。全員な。咎められる事はあるとしても、免停には絶対ならない」

「で、どんな奴なんだ？」

「……性格が歪んでいる人だと思います。温厚で、口調は丁寧なんですけど……すっごく恐いですよ?」

「ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
つ！
？

な、
何で！
？

何でそんな事を！」

「交友関係を築くのに一番楽なのは、他人の悪口で盛り上がることだ。だって聞いた事があるようなないような」

「安心しろよ。俺とその上司さんとの交友が深まるじゃないか」

「はいはい。後で聞いてやるよ」

アンシエラスの大絶叫は、爽やかな春風に乗って、彼方へと消えて

44

バイクをそこいらの駐輪場に停めて、恭一郎は欠伸を噛み殺しながら辺りを見回す。

スーツ姿で闊歩する男女が多数見られる中に、人影は無い。約束の五分钟前だというのに。五分前行動は社会人の基本だろう。溜息を吐きながら、恭一郎は視線を下方へずらす。

そこには、顔を真つ青にして縮こまり、可哀相なほどに怯えているアンシエラスが居た。

「何やってんだ、お前」

「……私は悪くない私は悪くない私は悪くない私は悪くない私は悪くない私は悪くない……」

——放っておこう。

再び溜息を宙へ投げた。その時だった。

「——あら、お早いですね？」

目にも鮮やかな金髪碧眼の女性が、にこやかな笑顔でいつの間にか隣に立っていた。

気配も感じさせなかった動きから考えるに、彼女の上司である事に間違いでは無さそうであったが……どうも、声のトーンが違う。昨日の女性ではないだろう。

「昨日に自分と電話していたのは、あなたではありませんよね？」

「ええ、そうです。私の妹なんですよ。昨日は寝惚けていた私と代わってくれたんですが……ご迷惑をお掛けしましたか？」

「いいいえ。シッカリした妹さんでしたね。初対面の相手にも緊張するどころか威嚇していましたから」

「あら……」

眉毛を困ったように歪めて、その女性は苦笑する。

——その一挙一動に、鼻を伸ばさないようにするのが精一杯だ。目の前にいる彼女は恭一郎の生涯の中で、最も美人で可愛い女性である。腰まで届きそうな長い金髪を自然体にしており、穏やかな笑みがデフォルトで母性を感じる。何も、母性は雰囲気だけではなく、そのバランスの良いスタイルにも遺憾なく発揮され、それは一種の芸術のよう。

悪くは無いスタイルを自称するアンシエラスと比べて、やはり圧倒的。うん、素敵だ。

失礼にならない程度に観察した後、アンシエラスの肩を叩いてやる。

「アンシエラス。来たぞ」

「ふえあおうい！？」

謎の奇声を発してアンシエラスは立ち上がり、女性の方を向いた。あからさまに硬い動きと硬い表情を伴って機械的な一礼を繰り広げる様は、とてもシニールである。

やはりというか。女性も流石に頬を掻いて困っていた。

「戦闘訓練じゃないんだから、もう少しリラックスしてもいいんですよ？」

「イイエ、滅相モゴザイマセン」

ギクシャクと返事をし、それ以来アンシエラスは黙ってしまふ。

埒が明かないので、取り合えず恭一郎は提案した。

「場所を移しませんか？ 春とはいえど、女性の肌に紫外線は毒ですから」

「あら、紳士なんですね？」

「いえいえ。貴女のような立派な淑女が、自分を紳士にするのですよ」

その切り返しが斬新だったのか、彼女は大きな瞳を更に見開いて、それから嬉しそうに笑みを浮かべた。

「あなたはとてもお上手ですね？」

超絶美人にニツコリと微笑みかけられ、嬉しくならない男など存在しない。

嬉しさの境地に至る反面、頭は冷静に稼動していた。

——戦闘訓練という言葉。ハッキリした力関係がある事が証明され、その上アンシエラスが怯えていた事から、彼女がアンシエラスよりも強いという事が判明した。

そう。彼女は、『恭一郎に気付かれぬまま』声を掛けてきた。警戒していなかったとは言え、声を掛けようとする意思が伝わり、気付くはずだったのだ。それなのに、彼女にはそれが無い。

……死線でも越えていそうなスキルだ。

「では、本社へ行きましょう」

「了解。行くぞ、アンシエラス」

「……うう。はい」

警戒は解かず、恭一郎は先を歩く彼女を追っていった。

本社、と言うのは間違いない。

連れてこられた高層ビルに案内されたのは良かったが、そこからの問題だった。

さて……一体、此处はどここの異空間だろう。

「好きなところに御掛けになってください」

「いえ、お構いなく」

にこやかに返したのは良いが……。

手渡された、やけに手触りの良い座布団を床へと落して、恭一郎は込み上げて来る言葉を溜息と共に放出した。

「何なんだよ、おい……」

案内された巨大な地下室。

そこには夥しい数の刀剣類が木造の床に突き刺さっており、しかし、黒光りしている壁は気味が悪いほど無傷である。部屋の天井も同様の素材で作られており、灯が無ければ真っ暗だったろう。

使用人がやってきて、恭一郎へ茶を持って来てくれていたが、手をつける気にはならず、隠し持っていた薄型ペットボトルの水で喉を潤す。

アンシエラスは先程よりも激しく震えていた。恐ろしくて仕方が無い、といった態である。

理由は何となく分かるが、そこまで怯えることではないだろう。現にアンシエラスは生きている。酷い事は、そうされないだろうに。

「……お前、どうしたんだよ」

「きよ、恭一郎さん！」

急な大声に内心驚いたが、構わずアンシエラスは続ける。

「逃げてください！ 私一人なら、なんとかできますから！」

「は？」

「戦闘訓練室なんですよ！ 足場は悪いですし、壁は何故か迫撃砲でも傷一つ付かない特殊障壁ですし！」

——物騒過ぎるな、日本。

「お待たせしました」

先程の金髪の女性が戻ってきた。

さて、恭一郎も一気に気を引き締めるを得なくなった。

目の前で薙刀を構えている女性が居れば、そういう対応を取るのは極々自然の事だろう。

相変わらずのおっとりした笑みで、女性は続けてくる。

「お名前を教えてくださいませんか？ 私はロセ・ラ・ヴィニアと申します」

「……新堂恭一郎です。それで、何故今頃になって名前を聞くのですか？」

「試合う相手の名前は知っておきたかったのだ」

そう喋る彼女——ロセは、やはりにこやかだが、既にこちらの隙を窺ってきている。剣呑とした雰囲気壊す笑顔すらも、ペースを乱す代物となりつつあった。

恭一郎は溜息を吐き、瞬時に立ち上がる。懷から鞘に収められた白刃を解き放ち、その輝きを外気に曝す。

アンシエラスは遠くに避難しているようだ。諸悪の根源が何を逃げていたのだと問い詰めたくもなるが、それを許す相手ではないだろう。

——威圧感。

あまりにも練熟された気が彼女から発されている。

右足を一步手前に踏み出して、両手で薙刀の切っ先をこちらの鳩尾へ向けているだけでも、喉元に刃を突きつけられたような、或いは貫かれたような幻痛が恭一郎の緊張感を否応無く高めていく。

気でも紛らわそうと、恭一郎は警戒を解かぬままに切り出した。

「何で試合うんですかね？ 理由を聞いても宜しいですか？」

「ええ。アンシエラスが倒された相手の実力、見てみたかったもので……」

「んじゃ、綺麗な淑女にお披露目しましょう」

瞬間、恭一郎は床を蹴っていた。

反動を利用して一気に近付き、白刃で柄元を切り裂く。

迫り来るナイフを跳ね上げた穂先で弾いて、ロセは鋭角から打ち込まれる突きを繰り出した。

急な動作も予測済み。掻い潜るように間合いに入り、掌底を彼女の鳩尾へ叩き込む。

——ロセは、自らが後退することで掌底のダメージを最低限にまで落とした。単純に闘いなれしているのかは知らないが、ロセは満足そうに微笑むばかりだ。その余裕染みた表情が、胸糞悪くて仕方が無い。

「凄いですね。ご職業は何を？」

「——体育教師だよ。それも、超御嬢様学校勤務の超エリートだ」
「あらら、そのお年で選民思想を掲げてらっしゃるのですか？」

「事実を事実として受け入れるのは当然だろうが」

——それは、幼少の頃から続いた、洗脳にも似た帝王学。
監獄のような部屋で、ある時は拳を受け蹴りを放ち、ある時は剣を肩が上がりなくなるまで振るい、ある時は勉強に寝食忘れて没頭した。

——負けるな。誰にも、劣るな。全てで圧倒しろ。長いものには巻かれるな。逆にこちらが巻き返せ！

その言葉どおり、人を屈服させ、抗う希望すらも奪う弁論術と暴力を身に付け、エリートの街道を歩む予定だったが、
だが、そうは至らなかった。

——一人の少女に、恋をしてしまったから。

恭一郎が少年だった頃、とある深窓越しに、見てしまった。
闇夜を模ったようなドレスを纏い、深い海色の髪を靡かせる紅眼の少女。

あまりにも、俗世から離れていた。
あまりにも、臃気だった。

——だからあまりにも、美しい。

その時に、修羅のような自分を顧みてしまった。

おぞましさに身をやつし、場違いで分相応だとしても彼女に近づく為——今の恭一郎を作った。

道化めいていて、何でも出来てしまうトリックスター。

実力と度胸と精神力。なれるだけの資質を、恭一郎は秘めていた。
そして、彼女と友人になった。

——今も浮ついたような笑みを浮かべ続けている。
人生という、舞台の上で。

「生憎と、もう加減する気も無いぜ？」

「あらあら、言葉が荒々しいですよ？」

「強引な男は嫌いかな？」

「いえ」

「だったら、構いやしねえだろ？」

ナイフを懷に収め、突き刺さっている剣を無造作に引き抜く。

今までとは違う質量と重量に身体を引っ張られたが、すぐにそれを制御する。

刃渡り八十センチ程のセミロングソード。刀身には曇りが無く、恭一郎は舌を打った。

曇りの無い刀身。それは言ってみれば、完璧に仕上げられた新造品。玄人が気を込め、念を込め、丹精をも込めて仕上げた刀剣類は、霞が掛かるか美しく曇るかのいずれか。こんな鏡のような剣、どうでもいい。

しかしまた、この剣を引き抜いたのも運命だ。なるべく大切に使わねば。

左の腰に引き寄せ、居合い——新堂家では抜き打ちと呼称された剣術の構えを取る。

大仰な動作に、ロセの瞳が少し伏せられた。警戒しているのだろう。

「あらあら、一介の教師さんが剣術を？」

「護身用さ」

「様になっでいて、とても素敵です」

「そりやどうも」

気を緩ませない。

居合いとは、そもそも防御主体の剣術法。自ら突撃するような技もあるのだが、そんなのは愚かではない。

刃渡りと自分の腕の長さが届く範囲。それを球の範囲で捉え、余すところ無く警戒し、焦れて飛び出してくる敵を待つ。

——要するに、精神の駆け引き。

「あらあら。では、私から行きますよ？」

そう言うのと、地面を蹴るのは同時。

高速回転させた薙刀を繰り出してくるロセ。死の恐怖の権化となつた彼女は、清々しいほど真つ直ぐな動きで接近してくる。

距離は縮まり——掛かった！

「閃ッ！」

掛け声と共に閃いた剣閃。その峻烈なる一撃は、確かにロセへと吸い込まれたが……彼女は受け止め、その衝撃を利用して宙へ跳んだ。
「これで！」

「——愚策だ」

恭一郎は真つ向から振り下ろされる薙刀を見て、苦笑した。

「空中では、身動きは取れない」

「——とも思いましたか？」

この世には、重力というものが存在する。

万物、それは人間といえど例外ではなく、この地球の大気内に存在する限りは、呪いのように付いて回る。

例外は無い。

筈だった。

なんと、何も無い場所から急上昇したと思ったら、今度は床へ下り、俊足でこちらの懷まで再度迫っていたのだ。

唐突な自体にも、恭一郎は慌てていない。それどころか、不気味なほどに静かだ。

「貰いました！」

そう、今こそ。

力強く足で地面を踏み、薙刀を——振るう事が出来なかった。

「へ？」

誰の間抜けな声だったのだろう。ロセか、はたまた観戦していたアンシエラスか。

事実、非常に間抜けな光景だった。

腐食した床が彼女の力強い足に踏み抜かれ、ロセは転倒。薙刀は勢いのあまり床に突き刺さっていた。

穴に落ちた美人と、それを間近で嘲笑する紳士と、呆然としている美少女。

この力オスな状況と痛いくらいの静寂は、取り合えず十分は続いたか。

居た堪れない静寂を裂いたのは、この場を静観し続けていたアンシエラスだった。

何が面白いのか、満面の笑みで恭一郎へと歩んでくる。その軽快な動きは、さながらスキップでもしそうなほどに浮ついていた。

「すごいですね！ 流石は恭一郎さん！ 超時空からやって来たとつぱらの噂で人外魔境と呼ぶのも恐ろしい魔の化身たるロセさんを打ち破るとは！ その悪魔をも越えた強さ！ 惚れちゃいそうですよう！」

「お前、虎の威を借る気満々だな……」

馴れ馴れしくバンバンと恭一郎の逞しい背を叩くアンシエラス。

と、穴に埋まっているままのロセがニッコリと……そう、『ニッコリ』と微笑んだ。

「アンシエラスさん？」

「何ですか？」

「……刺しますよ？」

「ひいひいひいひいひいひいッ!？」

——言わなければいいのに。

壮絶な怨念を感じたのは気のせいにしておこう。春風と共に流れてしまえばいいのだが、ここは室内。しかも地下。恭一郎の溜息もよく響いた。

思ったほど苦労もなく、穴の中からロセは這い上がってきた。白のフレアスカートについた汚れを払い、彼女は穴の隣に正座する。

「ご無礼を、恭一郎様。この件に干渉できる力を持っているかどうか、僭越ながら試させて頂きました」

「結果は？」

口の端を意地悪そうに歪める恭一郎。結果など判りきっている。

「——文句なし、ですよ。総帥にお通しします」

「その前にちよいと質問があるんだ。何、一つだ。時間は取らせない」

人差し指を突きつける恭一郎に、ロセはあくまでもにこやかに対応する。

「構いませんよ?」

「そうか。なら聞くが……アンシエラスを殺しに送ったのはテメエか?」

今までの紳士の仮面を剥ぎ取り、怒気すらも凍らせた低い声で恭一郎は問いかけた。

その問い掛けには、首肯が返ってきた。

「ええ。私が一任しております」

「……テメエッ!」

胸倉を掴み上げる恭一郎。彼は激情に身体を動かされ、心の中では絶対零度を保っていた。

凄まじい怒気に、ロセは愚かアンシエラスまでもが眼を見開いた。

「こんな成人してもない少女に何やらせてんだ糞がッ! 裏の界限に、女の子一人投げ出してんじゃねえよッ! 暖かい飯を家族や友人で囲んで……最悪コンビ二弁当でも構わない! 住まう場所も提供しないで何が組織なんだよどうなんだってんだッ!」

「あらあら。あなたには関係が——」

「あるんだよ。俺は教師なんだよ! ガキなんてこの世から消滅すればいいって思ってる最悪な教師だが、こんな性格的な意味で社会不適合者な女の子を一人前に指導する義務があるんだよ!」

「恭一郎さん……。今のすっごくジーンときたんですけど性格で社会不適合ってどういうことですか!」

「確かに、アンシエラスさんは社会不適合——いえ、可哀相な子ですけど」

「なんで酷い方へと!」

「——それでも、あなたは部外者でしょう」

「……成る程。そういう態度か」

恭一郎はゆっくりと溜息を吐き出した。――瞬間、床を踏みつける木が破片になってロセへと降り注ぐ隙を突いて、恭一郎は階段を五段飛ばしで駆け上がった。

――末端じゃ話にならない。上を捕まえ、締め上げ、せめて待遇は変えてもらわねば気が済まない。

これは恭一郎のエゴだ。今まで生活していたアンシエラスはどう思うのか知らないが、こちらかも知った事ではない。

駆け上げ、駆け上げ。

伸縮性に優れたスーツに感謝する。普通のビジネススーツだったら、とくに破れていても不思議ではない。

柔軟性に優れたシューズに感謝する。普通の革靴なら、今頃靴擦れしていたに違いない。

そして、この肉体に感謝する。エレベーターを追い抜く速度でどれだけ飛ばしても、悲鳴を上げるところか泣き言さえも吐き出さない。

――着いた。最上階。

六十階と記された番号プレートを無視し、総帥部屋と書かれたドアを見て、少し荒げていた息を整える。

ノックすると、呑気な声が返ってきた。

「はい」

……それは、聞き覚えのある声。

そう、つい昨日聞いた事があるような、尊敬している彼女の声だ。

「はーさん？」

「へ？」

ドア越しに素っ頓狂な声が聞こえる。

構わずにドアノブを捻り、執務椅子に座っているオレンジの髪をした女性を見て、恭一郎は瞠目し、続けた。

「何で、はーさんが……？」

「……恭一郎君。そうだね、自己紹介しなきゃだね」

椅子から飛び降りて、机の前に立つと、優雅に一礼をする。

「ハノン・アルグラッテ。琴乃音学園の理事長で、裏で暗躍している秘密結社、象牙の塔の総帥です」

——象牙の塔。

そのネーミングに特に意味はない。何者かが暗躍し、社会の暗がり蔓延る闇を切り裂く、非公開の政府組織にして裏の十字軍とも呼ばれている。

恭一郎も昔、噂を聞いた事があるだけだ。小さな頃、そのような存在があるだけ、父から教わった。

古い名剣の代わりに最新鋭の武器を執り、政府公認で法に背く数人のエリート。

——それが、象牙の塔。

彼女だと分った。総帥が彼女だと。だが、何もいえなかった。

——その華奢な双肩に写る責任という名の重石が、あまりにも大きく彼女を締め付けている気がして。

重圧を感じていないかのような、明るい笑みに胸が抉られるような錯覚がして。

その笑みが仮初だと気付いてしまつて。

「ふっふー。はーさんに会いに来てくれたのかな？ …… って、どうしてそんなに辛気臭い顔を？」

恭一郎は、その虚構染みた笑みを——立たせた。

「いや、その背丈に執務の机はごつくて分相応だなあって考えてたんだよ」

「へー。社会的に追いやられたい？」

「靴でも素足でも舐めるから許してくれ」

「え？ …… 舐めて、くれるの？」

「何故そんなに期待する」

互いに笑い合う時間をとったのは、当然時間延ばし。

聞きたくなかった真実の、聞かなければいけない真実の回答時間への。

神妙な顔をハノンがしたから、恭一郎も真顔になった。

それが、暗黙の合図。打ち合わせでも居ないのに、その意図は痛いほど両者に伝わった。

「恭一郎君がアンシエラスちゃんを保護してくれてたんだ」

「成り行きでな。んで、裏があるとは聞いてたけど、まさか象牙の塔とはねえ……」

「軽蔑した？」

「俺は職業なんかでこんなに綺麗な淑女、嫌いになったりしないぜ？」

「……ありがとう」

自虐的な笑みを浮かべ、ハノンは顔を背ける。

それだけでは駄目なのか、遂には身体を窓へと向けた。

「……でも、関わらない方がいいよ？ 恭一郎君はあくまで、光差す世界の人だからさ。闇に手をつ込んで、悪性腫瘍なんか取り除いてる場合じゃないんだよ」

「そうかもな」

「なら——」

「——でもな、はーさん。光差す意味に気付いちまったんだよ。俺こそ、表で生きていい人間じゃない」

「違うよ！ 恭一郎君は日の当たる場所で……！」

「——俺にナイフを貸してくれたよな」

恭一郎は、懷から銀色に輝くナイフを取り出す。

剣呑な気配に、ハノンは振り返る。それは、正しい判断だったろう。
「え……？」

恭一郎の手の甲には、ナイフが刺さっていた。大きな傷口からは、滾々と血が流れ、ワインレッドのカーペットを毒々しく染めていく。ハノンは戦慄した。自分が刺したわけではない。そんな仕掛けもこの部屋にはない。だとすれば、慥然とナイフを引き抜いている彼自身が突き刺したという事実しか、もう残されてはいない。
冷静さをかなぐり捨てて、ハノンは叫んだ。

「な、何やってるのツ!? 何でそんな事、普通じゃないよ……!」
「そう、普通じゃ出来ないよな。……俺、痛みと恐怖が無いんだよ。何でかな、いつから壊れちゃったんだろうな」

——未だ血が流れている掌。熱さは感じるが、痛みはまるでない。
「ああ、恐怖はあったかな。だってさ、幾ら殴られてもナイフで刺されても、痛くないんだぜ? 熱いだけって、それってどうよ?」

——だから、人間の限界を超えられた。
人を撲殺するのに恐怖はない。深層意識の更に底で、人間というのは無意識にリミッターを掛けてしまっている。
留め金だった『恐怖』が消えるという事は、人間の体の限界まで力を出しつくせるという事。

——知恵も力も勇気も、全てはそこから。

「天才ってのは、何かを確実に失ってるんだ。博識過ぎると新鮮さを失い、鍛え過ぎると達成感を失う。何かを得たいなら何かを捨てなければいけない。二律背反もいいところだよな」
もう、血が止まっていた。

恭一郎は血に塗れていない左手で、彼女の肩を抱き寄せる。

「この肩一つに、その荷は重過ぎるんだよ。でも、俺も協力してやったら、何割か担げるんじゃないか? つか、背負わせてくれなくても、俺が勝手に担ぐからな」

「……………恭一郎君」

苦笑するようなハノンの声。目尻を袖口で拭ったのは、見て見ぬフリ。

再び向けられた顔は、いつもの無邪気さに満ち溢れた、彼女の顔だった。

「それじゃ、ここでも琴乃音でもはーさんが上司だよ? オーケー?」

「勿論!」

「よしよし。親睦深まったし、恭君って呼ぶからね?」

「応とも!」

「よし、結婚しよう！」

「ガチロリじゃないんで……」

「真性ロリ布教の道はこの胸のように断崖絶壁なのっ!？」

——明るく振舞っている、子どもの仮面を付け続けている彼女。その彼女の笑顔が虚構だとしても、恭一郎は守りたかった。

——道化師には、明るい舞台は相応しくない。彼女のような主演こそ、スポットライトを浴びて幸せにならなければならない。

恭一郎は胸の中でその言葉を反芻する。

と、不意に手を取られ、満面の笑みで告げられた。

「——ようこそっ、象牙の塔へ！」

破顔した彼女の笑みは、真性ロリじゃなくてもドキリとしてしまう程に、魅力的なものだった。

黒い深淵で、海の髪の少女は嘆く。

——守ってくれる家臣は、皆遠い。

『二つ名』を与えられた家臣には、忠義と存在意義が働いている。だから、ここでじっとしていない。

暗がりの中、少女の愛らしい唇から、言葉が漏れた。

「暗い……暗いよ……」

孤独という毒に蝕まれていく自らの小さな身体をギュッと抱きしめて、彼女は嘆き続けていた……。

三章 命名の姫君

ハノンやロセとも和解し、この事件に首を突っ込む事を許された恭一郎は、アンシエラスの待遇についてハノンに相談した。

が、彼女は驚いていた。一ヶ月を余裕で過ごせるだけの金を預けたはずだと切り返してきたのだ。

アンシエラスに改めて事情を聞くと、

「いやあ、バツグ公園のベンチの下においてたら、万札抜かれちゃいまして……」

にこやかにそう答えた。無論、殴っておいたが。

再支給される分は恭一郎が預かる事になった。というのも、アンシエラスをあのかたに置いてやることを約束してしまったからである。

未成年、しかも社会不適合な人格を備える彼女には保護者が必要だ。どうせ、見れる範囲にいないと落ち着かないので、都合が良いと言えば良いのかも知れない。

それで、現在は彼女の日用品を購入している真つ最中である。

「おお〜！ 広いですねえ！ 物が一杯ありますよ！ 全部使っわけでもないのに、ホント無駄ですよね！」

「はしゃぎたいのか貶したいのかどっちかにしろよ……」

「うわ！ この下着スケスケですよ！ ふふ、恭一郎さん！ セクシーですか？」

「……ハッ！」

「鼻で笑いましたよこの人っ！？」

特に考えもなく、フラフラと『スーパ権儀』内を闊歩する二人。片や長身のフォーマルスーツ、片や純白のゴシックロリータの二人はやはり異質で、否応にも注目を集めてしまう。

居心地の悪さを感じる。視線を浴びてはいるが、その死角を突いて溜息を吐き出す。体面を気にする恭一郎らしい判断だ。

「それにしても、恭一郎さん。何で子どもが嫌いなのに私を置いてくれるんですか？」

「……これは例え話だが」

恭一郎は逡巡の末、そう切り出す。

「爆弾があるとする。その爆弾は自由に活動できて、いつ爆発するか分らない。しかし、爆弾処理の人員が付き纏っていれば、爆発を未然に防ぐ事が出来る」

「ふむふむ……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え！？ 爆弾って私！？」

「つくづく救いようがねえな。……はあ」

「露骨に溜息吐かれちゃいますと私のガラスのハートが鋭利な爪で引っかかれたような感じになっちゃうんですけど！」

「五月蠅そうだな」

適当に返しながら、腕時計で時刻を確認する。

もう正午になろうとしていた。入店したのが十時だったので、かれこれ二時間歩いた事になる。

聞いていたよりも、アンシエラスは無欲なようだ。見て触って殆どの物を満喫しているようで、買ったのは新しい歯ブラシと替えの下着だけ。

「なあ。服でも何でも買っついていいんだぞ？」

「あ、いいんですよ。これ、特殊繊維で縫われてますから。ケブラー……………でしたっけ？」

銃弾でも防げそうなゴスロリだった。

別に本人がいいというなら構わないのだろう。それよりも恭一郎としては昼飯の方が重要な問題だったりする。

「んじゃ、行くぞ」

「どこへですか？」

「歩きながら食えて、尚且つ美味しいモンを買いに」

店内にあるワゴンカーで売られているファーストフード店。恭一郎も度々足を運ぶ、そこそこに繁盛しているそこで包みを二つと適当な飲み物を買う。

恭一郎はお釣りを財布に戻しながら、暖かい包みとコーラの入った紙コップをアンシエラスへと手渡した。

「これ、何ですか？」

「ホットドッグだ。マスタード多目にいつもサービスしてくれるんだぜ？　しかも、ウインナーは一番よさそうな感じの奴を挟んでくれるんだ」

「……なんでサービスしてくれるんですか？」

「俺の舎弟、その千二十五番」

「覚えてるんですかその数！？」

「因みに、顔と名前を暗記してる奴は万を超える」

「天下でも狙う気ですか！？」

「そんな事しても面白くないだろうが。おら、さつさと食え」

ぎゃあぎゃあど騒がしいアンシエラスを諫めて、恭一郎自身もできたてのホットドッグを齧る。

柔らかい背割りコッペパンに挟まれた焼きキャベツとウインナーが口の中で一つになる。マスタードが全体に刺激を与え、その美味さを明瞭にしてくれた。口当たりのよいケチャップソースのお陰で特にクセも無く、食後も後味が残る事はあまりない。

口の中に押し込んで、無糖のカフェオレで流し込む。アンシエラスは食べながら、コーラも偶に口に含めて、幸せそうな顔をしていた。「なんだか、デートみたいですねっ！」

アンシエラスの屈託の無い笑いに、恭一郎は一瞬虚を突かれた。

——人生初デートが、よりにもよって人外魔境の子どもとは。

「はあああああ………」

「かつて無いほどの溜息がここにっ!？」

ショックを受けているアンシエラスよりも、恭一郎の心は深淵へと落ちていくのであった。

と、

「そのイケメン! こっち向いて!」

「なんだい?」

あまりにも唐突に、あまりにも高らかに響いた可愛らしい声に、店にいた全ての男たちが爽やかなスマイルを浮かべて振り返る。無論恭一郎も例外ではない。

「うん、ゴメン。普通に呼べばよかった。恭一郎君!」

「はい!」

「三十人くらい恭一郎なのは驚いたけど、これならどうだ! 新堂

恭一郎君!」

「ウイ!」

「それでも十人居るの!？」

驚愕しつ放しの女性。スタイルは良く、人懐っこそうな笑顔と栗色のロングヘアーが特徴的だ。

それは恭一郎が良く知る人物で、最近御無沙汰の恩人。

溜息を吐き、イケメンその一である恭一郎は彼女の肩に手を置いた。

「遊ばないでくださいよ、先輩」

あからさまに舌打ちをし、男たちが人並みに飲まれていく。後、ピントのような打撃音や野太い悲鳴が聞こえたが、自業自得だ。彼女持ちで反応する方が悪い。

その先輩——北条奏は、何だかいやらしく笑っていた。

「いや何、後輩君が可愛い女の子連れてたのを見たから、ロリコンは精神病だよと忠告しようかなあって!」

「フン。安心してください、先輩! 俺、ガキは嫌いですけどロリは許容範囲です!」

「会話が噛み合っていないのと忠告した初っ端からぶっ千切ってくれやがってありがとうコンチクショウ」

笑顔を引き攣らせながらチョコクスリーパーを決めてくる元気な女性である。

知り合ったのは大学生のバイト時代。先輩後輩はその時から。因みに、今は企業会社のOLだと前に聞いた。

好奇心が旺盛で、今も尚アンシエラスへと熱い視線を注いでいる。

「で、誰なの？　もしかしくなくても彼女だよね？」

「はははっ。それなら二次元と結婚します」

「以下なんですか！？　平面体以下なんですか、私！？」

「――ってな訳で、今こいつを居候させてるんです」

「どういうわけかサッパリだけど、聞かないであげる。それでいいんでしょ？」

「あなたの懐と胸の大きさに感涙し咽び泣いてしまいそうです」

「いやゝ！　照れるなあゝ！　もっと褒めて！」

このように、些か……いや、かなりの変人である。だがまあ、憎めないのだ。いつも明るくて、ムードを良くしてくれる景気屋。そんな彼女を素直に眩しいと、恭一郎は思う。

「ああ、アンシエラス。紹介しとく。こちら、OLの北条奏。元バイト先の先輩で、表社会を教えてくれた恩人だ」

「北条奏です。よろしくね？　てかさ、ゴスロリって流行ってるの？」

「へ？　いや、でも……可愛いじゃないですか」

「人によりけり、ただどね。さっき見たのよ、必死に逃げてるそれを黒くした衣装を纏ってる蒼い髪の女の子と、次いで追ってきた恰幅の良い女性とオッサン」

チエイス！　と身振り手振りで説明してくれている奏。

逐一に反応したのは、恭一郎だった。

――既知感。

その光景を見た事がある。過去に覚えがある。それを止められなかった。

二人の逃避劇。逃げて逃げて、力及ばずに連れて行かれてしまった若かりし日々の傷痕。恭一郎自身忘れかけていた唯一の失敗。

「どっちだ先輩！」

「東口から外に出て、海の方角に向かった。どったの、後輩？」

何か顔色悪いけど

「行くぞアンシエラス！」

「ほへっ！？　ちょ、転びますって！？」

全力で彼女の細い手首を掴み、疾走を開始する。

人込みを掻き分け、見えなくなっていく恭一郎へ向けて、先輩からの一言。

「……青春だねえ」

やたらと、その一言は年老いたように感じた。

裾を翻し、その少女は逃げる。

しかしその華奢な身体には、もう逃げるだけの体力は無い。

——木を隠すなら、森の中。

この格言をいった人物は誰だったか。その言葉は酷く曖昧な意味しか持たない。

広葉樹の森に一本の針葉樹を隠したとしても、その言葉は成立する。

しかし少女は、咄嗟に思い出したその言葉の意味を深く考える事無く、闇夜を飾ったようなドレスと同色の闇に身を竄す。廃工場のコンテナの陰に隠れたのだ。

確かに、黒は黒。だが黒にも種類がある。

荒くなっている呼吸を押さえ込んで、紅い瞳で外を確認する。

——いけない、目が合った！

「その雪って人かもしれないんですか？」

「ああ、多分だな」

バイクを走らせながら、恭一郎は既知感の原因だろう過去をアンシエラスに聞かせていた。

忘れかけていた出来事で、恭一郎唯一の失敗談。

——深窓の令嬢。雪と名乗った女の子と、恭一郎は友達になった。現実を知りすぎた恭一郎と、物語の世界しか知らなかった雪。

恭一郎は彼女を手を取って街を見て回った。

病気でもなんでもない彼女が何であんなところに押し込められているのか、それは分らなかったが、無表情の雪の表情も柔らかくなり、遂には笑ってくれた。恭一郎もそれを見て微笑む。

——優しい時間だった。

そして、己の浅慮さを自覚する良い機会だった。

ある日、雪が屋敷にいないことがばれてしまう。

二人は逃避に走ったが、子どもの体力だ。直ぐに追いつかれる。

追い詰められ、少年だった恭一郎は奮戦した。

叩き込まれた武術の下法を使ってまで、それこそ相手の過半数を再起不能に陥らせながら、殴って蹴って投げてぶつけて捻って決して吹っ飛ばした。

だが、所詮子どもは子どもだったのだ。

残った複数人に捻じ伏せられ、気絶させられていた。

翌日屋敷に行くと屋敷の面影すらなくなっており、幻と錯覚しかけていたのだ。

——彼女は、確かに存在していたのだ。

「……じゃあ、恭一郎さんが子どもが嫌いな理由って、本当はそっちだったんですね」

「は？」

「守れなくて、浅慮な子どもだった自分が嫌いなんですよね？」

「……失言だった」

溜息を吐き、恭一郎はスピードを上げる。

「それより、場所は分かるんですか？」

「最初お前と出合った廃工場だ」

「えっと……根拠は？」

「勘だ」

「相変わらず便利ですね、それ」

そうこうしている間に、百メートル手前まで進んでいた。物陰にバイクを停め、フルフェイスのメットを被ったまま、恭一郎はスーツの上着を脱いだ。

「どうしたんですか？」

「コイツだよ」

昨日支給された、漆黒のライダージャケット。何でも丈夫な素材で出来ているらしく、戦闘時に役に立つとか何とか。象牙の塔は何を持っているのだから。

更に渡された警棒。黒いし、警察が使っている物となんら変わらない。なにやら柄元に引金があるのだが、色々と拙い気がするので、気にするのを止めておいた。

それらを纏い、革のグローブも嵌めて、準備万端。

「で、どうやって工場に近付きます?」

「ふむ」

問題はそれだった。

入り口がある場所は、酷く見晴らしが良い。真っ黒な恭一郎と真っ白なアンシエラスが近付こうものなら、即刻で見付かるだろう。

思案していると、アンシエラスは何かを持ってきた。

「恭一郎さん! ダンボールですよ、ダンボール!」

「よし、死ね」

「一瞬の躊躇いも無くそんな笑顔でっ!」

——しかし、これしかないのか?

こういう時、軍隊に詳しい奴が……そう言えばいるじゃないか。ミリタリー問わず、様々なジャンルに手を染めた究極の室内人間が。携帯を開き、ダイヤルプッシュ。番号は覚えている。

数回のコールの後、栄治が電話に出た。

「恭一郎? どうしたの? あ、二次元鑑賞会なら来週に誘う予定だからさ!」

「緊急事態だ、栄治」

「……分かった。どうしたんだい?」

「俺は見晴らしの良い場所から潜入しなければならない。しかし、周りには隠れられる場所も無く、隠れようにも人が二人は入れそうな覗き穴のあるダンボールがあるだけ。お前ならどうする」

「馬鹿だなあ! ダンボールに入るに決まってるよ!」

「何で俺が馬鹿呼ばわりされるのか疑問だが、何故だ?」

「彼の伝説の傭兵もダンボールで行動するんだ！ 透明になる迷彩服よりも、ロマンなんだよ！」

「ロマンで命落としてりゃ世話ねえだろうが、それしかないか」

「死ぬなよ、大佐！」

「傭兵なのに大佐へ命令口調かよ。……まあいいか。失敗したら、お前顔の形が変わるまで殴るからな」

「ちよつ！？」

通話を切り、マジックで何かをダンボールに書いているアンシエラスへと声を掛けた。

「……何を書いてやる」

見ると、得意げな表情でアンシエラスがダンボールを軽く叩いた。

——『怪しくありません』とある。

「良いアイディアですよね！ これで怪しめません！ ってあれ？ なんてそんなチヨークスリーパーがあいたあああああああああつ！？」

「怪しさに拍車を掛けてどうするんだこの馬鹿野郎！ 説得力無さ過ぎる上に俺なら絶対に中身が気になるわ！」

「ええつ！？」

まあ、これに入るしかないのだが……。

気配を殺して中に入り、こそこそと進んでいく。

恰幅の良い男と屈強そうな女が出入り口に立っている。

こちらに気付いたか、男は首をかしげた。

「ダンボール？」

「風が運んだのだろう。春の風は思春期の男子に夢と希望を齎す効果を秘めているらしいからな」

（思春期の男子に謝れよ）

「スカートが捲れるな。自分も学生時代は待望していたものだ」

（いや、知ったこっちゃねえよ。お前の過去なんて知ってもリアクション取れないだろ）

「それに、怪しくありませんとあるだろう？ 逆に怪しく無い気が

する」

「一理あるな」

（ねえよ）

心の中で突っ込みながらやり取りを聞いていたのだが、彼らが暗がりへ入っていくのを見、恭一郎達も気取られないように進んでいた。

男が声を張り上げる。工場内は広く、野太い残響が耳に障った。

「姫様！ お戻り下さい！ 我等二つ名の軍隊はあなたの為に存在しているのです！」

「スラムに生まれた私に意味をくれた！ 私は『女騎士』、彼が『騎士』と、あなた様が名付けてくださった！」

「……もう、一人は嫌なの」

女の子のか細い声が、辛うじて耳に届く。

「一人ではありませんね！ 我等近衛隊がシュニー様、あなたを御守り致します故！」

「……そうじゃ、ないの……」

嗚咽交じりの言葉が、暗がりから聞こえる。

——恭一郎の頭の中で、何かが繋がった。そして、全容が分かってしまう。

（？ 超展開過ぎて、何が何やら……）

（恐らく……いや、間違はなく、今回の二つ名事件に係わっている人物だろう。その首謀者と従者がいて、祭り上げられていた首謀者が逃げ出した、ってところか）

（だったら、今のうちに捕まえて……）

（二つ名は、付けられた者にその名前の真髄を付与するんだって聞いている。それが騎士や女騎士なら、拙いぞ）

（何ですか？）

（先ず、狩人とは格が違う。階級も強さも覚悟も、な）

（まあ……そうなんでしょうけど）

（次に、騎士の最上は拙い。五十キロ以上の甲冑を纏った上、二メ

ートル以上のツヴァイハンダーソードを振り回せるだけの力を持てるからな)

(それ人間じゃないですよ!?)

(お前も似たり寄ったりだろうが)

(でも、女騎士ってそこまで強くないんじゃないですか?)

(仏蘭西で昔、農民の女性が人々を率いて、孤立し四面楚歌の状況に陥っていた仏蘭西の王を救い出したって事がある。ジャン・ヌ・ダルク。その後に魔女の疑惑を掛けられて殺され、後に聖女となった人物だ。恐らく、女騎士のイメージはそこから来ている)

(……ヤバくないですか?)

(ああ、ヤバイ。……はーさんに連絡取ればいいんだが)

好転しようもない状況であつたが、不意に第三者の足音が響いた。

そして、噂に出ていた少女のような女性と、愛らしい美女がコンテナの影から現れる。

本来明るい色彩であるオレンジと金色は、されど闇に包まれる事が当然のようにより映えていた。

「ふっふー。話は聞いたから、大人しくして欲しいな?」

「……何者だ」

「何で人を殺すの?」

質問に答えず、可愛らしく小首を傾げてハノンは訊ねる。

男は一瞬躊躇ったが、口を開いた。

「我等は姫様の為、他者を滅ぼしている。他者は姫様に影響を及ぼしかねない。禍根は根こそぎ燃やし尽くさねば」

「それを、その姫様は認めてるの?」

「奥ゆかしく優しいので、反対なさってはいますが、分かってくれましょう」

「……ふーん。それじゃあさ——」

ハノンの姿が一瞬で消える。

気付けば、実的な点では世界最強と呼べるだろうオートマチックピストル——デザートイーグルを男の顎へ押し付けているハノンが

いた。

殺気の欠片も無い——いや、感情の動く気配すらない彼女。その口元が、微笑へと化ける。

「Good bye The Knight」(バイバイ、騎士さん)

弾むような声音と重なるように、銃声が轟いた。

反射的に女騎士が駆け寄ろうとするが、死角から突き出された薙刀を回避したのでそれも叶わない。

ハノンとロセの連携攻撃。あまりにも速く、計算されつくされている。

が、ハノンは騎士から距離を取った。

——宙に弾丸が浮いている。しかし、原因も直ぐに分った。

何も無かった彼の周りから、半透明——徐々に質量と重量感を帯びて、それは完全な甲冑になった。男は続けて、腰から冗談のように長いツヴァイハンダーソードを取り出し、構える。

気付けば、女性も剣以外は同じような装備に変貌していた。剣は中剣で、先が尖ったエペのような代物である。

彼らの姿以外、全て古風——あたかも、中世をそのまま持って来たような装備だ。

フルフェイスの兜越しに、男は感心したような声を漏らす。

「やるな、子どものクセに」

「経験豊富なの。そっちの方はまだだけどね」

「恋愛経験がないのは一緒だな」

「やだなあ、おばさん。私達は『出来ない』じゃなくて『しない』から。可愛いし」

——発触発の空気。

それを破ったのは、ロセだった。

「ああ……。こんな時に駆けつけてくれる、紳士な方はいらっしや

らないのでしょうか……」

気付くと、恭一郎は口セの手を取っていた。ダンボールから瞬時に脱し、駆けつける。我ながら酷く間抜けな絵図だと自覚してはいるが、最早条件反射のようなものだ。正す方法もないし、正そうとも思わない。

「……貴様、何者だ」

「通りすがりの爽やか紳士です！」

「そうではないだろ！ 名前だ名前！」

「俺の名は——」

言いかけて、自分がフルフェイスの遮光メットをしている事に気が付く。向こうからこちらは分らない。なら、本名を隠していても問題ない。

単純な、しかし的を射た思考を経て、取り合えず顔が無い何かを浮かべてみる。——出たそれは、彼の有名な恐怖劇から神話へと変貌した物語で、千差万別に姿を変えるとされる邪神の名前だった。

「——無貌の神。ナイアルラトホテップ」

「ほう」

「だったら良かったのに」

「この状況でボケるのは凄まじい神経だと認めてやるが、ふざけるな」

「じゃあ通りすがりのイケメンだ」

「いや顔が分からん」

「我俣言っんじゃありません！」

「逆切れか！ しかもオカンが貴様ッ！」

「何切れてんだよ。はンッ」

「急に冷静にッ！？」

男同士のやり取りを黙って見ていた女騎士が、もう我慢ならんと剣を構えて殺気を飛ばしてくる。

気迫。女としての人生を間違ったとは思えないほどの、不可視な圧迫感が押し寄せる。とめどなく、それは自らを泉元とするように

溢れ続けていた。

「我等のペースを乱そうと。そうは行かんぞ」

「いや、遅え。もう術中に嵌ってる。俺、怪しいと思ってるだろ？
後ろを見てみるよ」

「そのような見え透いた論術！ 誰がその手に乗ると——」

言った瞬間、男は背後からの奇襲に対応も出来ず、鎧の重量もあつてか派手に転倒した。

女は男の安否が心配ではないのだろう。無情にも距離を取り、背後から神速の攻撃を仕掛けたアンシエラスへと眼光を飛ばす。

「貴様……どこに隠れていた」

「そこに」

『怪しくありません』とふざけた言葉が書かれたダンボールをアンシエラスが指差すと、やはりというか、女騎士は酷く落ち込んでいる様子だった。その最中にも隙が無いのが、流石というべきか何と
言うか。

「クツ……。屈辱だ。私があんなチャチな隠密行動を見破る事が出来ないとは……！」

「恭一郎さん、あの痛々しいですね」

「しつ。見ちゃいけません」

「ぐあああああああああッ！！ 黙れ黙れ黙れッ！！」

「恭一郎くゝん。本当の事言っちゃ可哀相だよ」

「そうですね。ですが、ちよつと頭の構造が他の人と違うだけでしょうし、総帥もその辺で……」

「って、最後の貴様！ 一番おつとりしてそれで油断してたのに一番傷ついたろうがッ！」

「あら……」

口セへ非難が飛んでくる。

が、しかし異常が起きた。アンシエラスが吹っ飛ばしたはずの男が、起き上がっていたのだった。

「鎧は、貫通したはずですけど、どうし——」

首を傾げて物騒な事を抜かしているアンシェラスだったが、男の哄笑によって最後まで聞こえなかった。

「はーっははははははッ！ 素晴らしい、素晴らしいぞ無貌なる男よ！ かつてこれほどに頭が切れ、また隙の無い相手と対峙する事があつただろうか！」

「……そうかい。なら、残念だろうさ。お前と蜜月過ごす予定なんざ、入ってねえんだよホモくせえ。だからよ……」

警棒を振り下ろす。伸ばされてもないその警棒は実にリーチが不足していて、男が両手剣を掴んで恭一郎へと差し向ける方が、圧倒的に早かった。

だが、ギミックに気付いていた恭一郎は、そこで今まで警戒して封印していたトリガーを、躊躇無く引いた。

爆発的な加速度で伸びていく射程。いや、実際爆発していた。連続の密室爆発によって、伸びる速度は音速に迫る勢いで加速し、延長の果て——

「——ゴギイッ!?」

「ブサ面が俺とタメ利こうなんざ百億万年早えんだよ」

騎士の男の顎を、兜ごと穿った。

慣性が更に働いて、男を天井部まで吹き飛ばし、落下の衝撃も相俟って、完全に男は沈黙した。顎の骨が碎ける感触も、気味が悪いほど如実に伝わってきたのだ。もう起き上がれまい。

と、恭一郎のがら空きの背へと、甲冑など纏っていないようなスピードで突きを繰り出す女騎士。

しかしその剣先の軌道は、曲芸レベルを軽く超えたデザートイーグルの連射によって逸らされた。そこへ口塞が飛び込んできて、鰐迫り合いの形に持ち込む。

「くっ！ 倒れよ！」

「いいですよ」

薙刀へ掛けていた負荷を無くし、柔らかな身体を自在に操って勢い

余ってつんのめった切っ先を避ける。

一瞬、隙が生じる。

しかし、刹那にて事足りた。

アンシエラスの無情なる斬線が無数に走り、女騎士をバラバラに掻っ捌く。

グロテスクな死体になるかと思いきや、その亡骸は灰になって消え、何も残らない。

純白の剣を回転させて傘に戻し、その傘を勢い良く開いて、真紅の雫を落としているアンシエラスはやはり平然としていた。恭一郎は、人が間近で死ぬ事にどうしても慣れない。いや、慣れないほうが正常なのだろうが、感情の切った張ったが下手になってしまっている自分に危機感を覚えていた。

「あー……。あまりにも力が強いと、灰になるのかな？ どうでもいいけど、ようやく人数が三人減ったよ」

しぶとく生き残っていた男の騎士へとトリガーが躊躇無く引かれる。男もまた灰になり、吹き込んだ風によって三分の一が飛んでいった。

「連中、何人いるんだ？ はーさん」

「さあ？ 騎士の次に出てくるのは、王様？ 何でもいいけど、片付けないと」

「あらあら……。総帥、もう一人居るわ」

「待ってくれ。俺に任せといてくれないか？」

フルフェイスのメットを取って、恭一郎は隠しきれない気配の主へと歩み寄った。

「こ、来ないで……！」

「安心してくれ。俺は味方だ」

——思わず、瞠目した。

シュニーと呼ばれた少女は、深窓の令嬢と瓜二つだった。

長く美しい、ギリシアの海のような色合いの髪と、ルビーのような
紅く大きな瞳。纏っている衣装は黒のドレスとレースが合わさった、
奇しくもアンシェラスと対極になるような黒いゴシッククロリータ。
こちらを見上げる瞳は怯えに侵されていたが、こちらを見ている内
に幾分和らいでくれた。

「……貴方は、何故助けてくれるんですか？」

「君、俺の知り合いに似てるんだ。奇妙なほどにな。俺が未熟だつ
た所為でその子は守れなかったけど……なんていうかな、自己満足
さ」

雪。——否、シュニー・ヴォルフガングは知っている。

この人が新堂恭一郎であると。過去、私に明るい場所を教えてくれ
た掛け替えのない恩人であることを。最後まで私を守ってくれた、
慈しむべき人であると。

だが、ああ言われて破顔された日には、本当の事なんて——名前を
偽っていたなんて、言えるわけがない。

それにもう、一人じゃなくなる。

彼が味方になってくれる。

それが何とも心強く、心苦しくて……

私は、彼の逞しい胸に飛び込み、泣く事しか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2802o/>

鐘の音の少女

2011年3月30日11時01分発行